

---

# インフィニットストラトス ISと仮面ライダーを手にした者

ハイランダー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニットストラトス ISと仮面ライダーを手にした者

### 【Nコード】

N8603U

### 【作者名】

ハイランダー

### 【あらすじ】

とある出来事からIS を使えるようになった少年  
国崎来人の若干意味不明な物語です

7月24日

小説のタイトルを変えました



## プロローグ（前書き）

初投稿です。

駄文で不定期更新ですが

読んでもらえると幸いです。

## プロローグ

コンコンッ

「入って」

ガチャッ

「失礼します」

入って来たのは本作の主人公国崎来人

「姉さん、急に呼び出してどうしたの？」

来人は目の前にいる女性 来人の姉 国崎冴子に言う

来人は今日冴子に「大事な話がある」と言われ  
冴子のオフィスにきていたのだ

「それで、大事な話って何？」

「ええ、来人あなたに……」

「僕に？」

「IS 学園に行ってもらっわ」

「え？ええええええええええ！？」

IS 学園は、IS 操縦者を育てる学校  
そしてIS は女性だけしか使えない  
つまり女子校なのである

「何で僕が!？」

「あなたがIS を使えるからじゃない」

しかし来人は男なのにIS を使う事ができる

「それにもう隠しきれなくなってきたから」

「あなたが入学と同時に発表するから」

「そんな無茶苦茶な」

「お父様の許しは貰っているわよ」

来人の父、国崎龍兵衛は  
日本経済を支えている国崎財閥の会長である  
ちなみに冴子は社長

「分かったよ」

「じゃあ入学試験は明日だから」

「分かった」

「って明日!？」

こうして来人はIS 学園の試験を受ける事になつたのだがその試験が少しトラウマになることを彼はまだ知らない

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？

こんな駄文になりますか？

よろしく願います

ちなみにIS知識はアニメしかありません



## 第1話（前書き）

今回はあの人が出ます  
皆さんご存知あの人は

## 第1話

「どうしてこうなったんだろう…」

僕は試験会場の前に来ていた

『仕方ないだろう?』

と僕のISの人工知能システムフィリップが言う

『君は男なのにISを使えるんだから』

「でもさあ…」

『政府に捕まって実験に使われたくないだろう?』

「う…うん」

『だったら文句を言わずに受けるんだ』

「分かったよ…はあ」

ため息をつきながら会場に入って行った

『ちなみに篠ノ之束の提案らしい』

「東さん…」

「バイザー付けろって言われたけどなんで？」

『男と言つことを隠すためだろう？』

『そろそろ君の番だ、準備するんだ』

「分かった」

僕は右腕に付けている待機状態のIS を腰に付ける

「行くよ！ダブル！」

待機状態のIS を中央から左右に倒す

アリーナに出ると試験官が立っていた  
驚く事に試験官は…

男だった

「なんでえええ!?!」

「うるさいわねえ、さっさと終わらせろわよ」

「私、女の子には興味ないの」

「ねえ、フィリップ」

『なんだい?』

「あの人ってオカム」

『待つんだ!それ以上言うと死亡フラグだ!』

「何?来ないならこっちから行くわよ!」

IS の腕が伸び襲いかかってくる

「ねえ、死亡フラグってどうゆうこと」

『来人!前を見るんだ!』

「へ?へぶつ!」

顔面に直撃した

その反動でバイザーが取れた

「...!」

試験官が固まってる

男とバレたからか？

「何？何あのイケメン！」

そう言うと両腕を伸ばしてくる  
それをパンチやキックではじく

「イケメンで強いのね！嫌いじゃないわ！」

そう言うと何度も腕を伸ばし殴ってくる

「嫌いじゃないわ！嫌いじゃないわ！」

隙をつかれて捕まってしまう！

「しまった！」

「おいで！抱き締めてあげる！」

ダメだこの人本格的に気持ち悪い

「フィリップ！プリズムビッカー！」

「了解した」

IS スーツのあたりから盾と剣が一体化した武器が出てくる  
盾から剣を抜き腕を切る

「ああ！切れちゃった！」

「このまま決める！」

剣の所にあるスイッチを押す

【プリズム！マキシマムドライブ！】

「『プリズムブレイク！』」

試験官のIS を切り裂きシールドエネルギーがゼロになる

こうして無事に合格した

試験官の人は泉京水先生と言っらしい

僕は泉先生が少し苦手になった

## 第1話（後書き）

泉京水を出しました（笑）

ただこれがやりたいだけに出しただけなんですけどね（笑）

京水のIS はルナ・ドーパントその物ですよ（笑）

次は主人公紹介になると思います

## 主人公紹介（前書き）

原作にオーズを追加しました。



## 主人公紹介

国崎来人 / 仮面ライダーW / 仮面ライダーオーズ

性別 男

髪型 W のフィリップと同じ

顔はイケメンで女装すれば可愛いと思う顔

性格 オーズの映司みたいな感じ

パンツは関係ない

専用IS ダブル

一人称僕

国崎家の末っ子。

旅が大好きで、姉の冴子の海外出張についていたりしている。リアル地球の本棚並に頭が良い

とある国でオーズドライバーとオーメダル15枚を手に入れて、それ以来仮面ライダーオーズに変身できる。

またある国で、オーズ本編の映司のような出来事があり困っている人がいたら、あまりほっておけない性格

恋愛には疎い。いわゆる唐変木

ビギンズナイトという出来事があり、それからIS が

使えるようになり、仮面ライダーW に変身できるようになった。

ソウルサイドは自身のIS の人工知能システムフィリップ

篠ノ之束のお気に入り

一人称と言葉使いがあっていない

## 主人公紹介（後書き）

ノープランで書いたら凄いゴタゴタしてしまったOTL

追加設定を言ったら一夏が女の子になります

理由はヒロイン全員主人公ハーレムにしよう

したら一夏どうしようとなって

女の子にする事にしました。

IS 設定はまだ考え中なのでもう少し先になると思います。

次からは本編に入ると思います。

## 第2話（前書き）

本編に入ります！…かも

## 第2話

入学当日

僕はIS 学園に向かって

愛用バイク

マシンハードボイルダーに乗っていた

(このバイクの名前ネーミングセンス無いなあ)

少し失礼な事を考えながら

『来人、今テレビで君の事が放送された』

「そうか、早いなあ」

その時僕は嫌な予感がした

『ああ、篠ノ之束が電波ジャックしてな』

「予感的中!?!」

束さんがどう言ったかは知らないが  
多分問題は無い…と思いたい

『来人、IS学園が見えてきたぞ』

「ああ、遂に来たか」

校門の前に人影が見えた

「あれは…千冬さん!？」

「久しぶりだな、来人」

いたのは幼なじみの姉 織斑千冬だった

「だがこれからは織斑先生と呼べ、国崎」

「はい!織斑先生!」

「覚えが速くてなによりだ」

織斑先生とIS 学園に入ろうとしたその時

「ま…待て!」

僕達が振り返るとオタクっぽい男の人がいた

「なんで…なんでお前がこんな女の園に入学出来るんだ!」

「女子高を女の園って…!？」

僕は男の人が懐から取り出した物に驚いた

「ガイアメモリ!？」

「ガイアメモリ?」

織斑先生が聞いてきたが気にしてる暇はない

「お前だけに良い思いはさせない！」

ガイアメモリを腕にあるコネクタに差し込む

「燃える！」

【マグマ！】

男の人はマグマ・ドーパントになる

『やはりドーパントになったか』

「フィリップ！あれやるぞ！」

『了解した』

「待て、話がついていけないのだが」

「織斑先生は下がってください」

そう言つて2つのスロットがついた物を取り出す

「！？…分かった」

織斑先生を下がらすと手に持っているものを  
腰の前に付ける

その物はベルトになる

そして懐から黒いガイアメモリを取り出す

そしてガイアメモリを起動させる

【ジョーカー！】

「行くぜ、フィリップ」

『ああ』

【サイクロン！】

フィリップが答えると何処からか聞こえてくる  
そして2つあるスロットの右側に緑のガイアメモリが  
出てくる

「『変身！』」

そう言うと右側にあるガイアメモリを差し込み  
手に持つ黒いガイアメモリを左側に差し込み  
2つのスロットを横に倒す

【サイクロン！ジョーカー！】

音が鳴って来人の姿が変わる

「なんだ？あれは？」

「『さあ、お前の罪を数えろ！！』」

左半身が黒で右半身が緑の戦士仮面ライダーWに  
変身する



「この野郎！」

マグマ・ドーパントが殴りかかるが

W は受け流す

「悪いが早めに決めさせてもらっぜ！」

W は数回マグマ・ドーパントを殴ると  
ベルトからジョーカー・メモリを抜き  
右腰のマキシマムスロットに差し込む

【ジョーカー！マキシマムドライブ】

Wの足元に竜巻がおこり

Wはマキシマムスロットをはじく

「『ジョーカーエクストリーム』」

そう言うと両足蹴をマグマ・ドーパントに  
くらわす

「ぐわああああー！！」

マグマ・ドーパントは爆発し、そこには  
オタクっぽい男の人と壊れたマグマのガイアメモリがあった

「ふう、片付いたか」

「ああ、だが色々と説明してもらっぜ」

体から変な汗をかき、後ろを振り向くと  
やはり織斑先生がいた

「はい…」

今日はずいていない  
そう思った

## 第2話（後書き）

本編に入れなかったOTL

Wの初登場を考えたら入れませんでした

次こそは本編に入ってみせます！…たぶん

感想などもお待ちしてます

第3話(前書き)

書き直しはつらい

### 第3話

あれから色々と説明した

ガイアメモリの事も

W の事も

「なるほど、国崎が保管していた  
ガイアメモリが流出」

「はい」

「そして悪用されたら壊すと」

『言い方に問題があるが気にしないでおこづ』

「だがあの事に関わっていたとはな」

「はい、ビギンズナイトに」

「話は以上だ。今から教室にいくぞ」

「あ、はい！」

教室の扉を開けると案の定女の子だけだった

「皆、自己紹介は済んだな？国崎自己紹介しろ」

「あ、はい！国崎来人です。男なので違和感はあると思いますがよくお願いします」

シーン

あれ？

失敗したか？

「きゃ……」

「きゃ？」

「きゃああー！ー！」

あああゝ、耳がキンキンするゝ

「うるさいぞ、馬鹿ども」

一瞬で静まり返ったさすが織斑先生

「国崎早く席に着け」

「あ、はい」

僕の席は、最前列の窓側から2番目の席だ

1時間目は両隣から凄い視線を感じた

休み時間

女子がひそひそ話をしてる

聞こえる時点でひそひそ話ではないが

「あの人イケメンだよね」

「しかも国崎って凄くお金持ちじゃない」

「イケメンでお金持ちって凄い勝ち組じゃない？」

勝ち組って何？

「あのイケメン嫌いじゃないわ！」

今泉先生いなかった！？

すると右隣の人が喋りかけてきた

「来人！僕の事覚えてる？」

「ん？ん？」

「あ！一夏だな！」

「うん！覚えててくれたんだ」

「ああ、馬鹿っぽい感じでわかったぜ」

「ちょっとバカっぽいってどうゆうこと？」

「ははは、冗談だって」

一夏と話していると後ろから凄い視線を感じる

「あのさ、あんま見ないでくれる？等」

「！？分かったのか？」

「ああ、しかし可愛くなったな」

「そ、そうか／＼可愛くなったか／＼」

「ああ、うっ！」

後ろから凄い殺気が！

「そつだよねえ、篝ちゃん可愛くなったもんねえ」

怖い、怖すぎる

「どうしたの？来人？こっち向いてよ」

ヤベエ、振り向けない。

「ねえ、ら〜い〜と〜」

泣きそう、誰か助けて

「ちょっとよろしくて？」

「はい？」

「まあ！なんて態度ですか？」

いきなり変な事言わないで下さい



「あの、誰ですか？」

「わたくしを知りませんか？このイギリス代表候補生セシリア・オルコットを」

代表候補生か、それなりに強いのか？

「ねえ、来人？」

「どうした？一夏」

「代表候補生って何？」

クラスの何人かがコケた

「お前それ本気？」

「？うん」

よくそれでIS 乗ろうと思ったな

「いいか？代表候補生ってのは」

以下略

「分かったか」

「うん！」

「こんな低脳な方と一緒にクラスだなんて何のためにこんな島国に

来たのか分かりませんわ」

「そつちだって大したお国自慢無いじゃん世界で不味い料理何年一位取るのよ」

これ何の戦い？

「あなた祖国を冒涇いたしますの!？」

「あなただつて似たような事行つたじゃない!」

すげえ嫌な予感がしてきた

「ふ…ふん、わたくしはあなた方とは違つてエリートですから」

「なんせ、ただ一人試験官を倒したのですから」

「ん？僕も試験官倒したぞ」

「え？わたくしはただ一人だけと」

「女子の中でただ一人つて事じゃない？」

あーそうなつたらエリートもクソも無いわな  
あらら代表さんも顔が真っ赤だ  
なんかまた嫌な予感が

「お〜い大丈夫か？メズールさん」

「誰ですの!そのかたは!」

あー声が似てたからつい

「こうなったら決闘を申し込みますわ！」

決闘って古くさい

「受けてたつよ!！」

「何かわかんねえけど僕は知らねえぞ」

「何いってますの?」

「はい?」

「もちろん貴方にも受けてもらいますわよ」

「そりゃ無いぜメズール」

「だから誰なんですの!」

こうしてセシリアさんの決闘を受けることになった  
やっぱ今日はないぞ  
さて決闘の内容聞いてないぞ!

### 第3話（後書き）

3話書けました

『フリリツプ』出番まったくなかった

出れただけマシだよ

書き直しはやはりつらい！

感想などお待ちしています

## 第4話（前書き）

主人公紹介にほんの少し加えました

## 第4話

あれから色々あって

三時間目になった

担当は織斑先生だった

「そつえばクラス代表を決めてなかったな  
誰かする奴はいないか？拳手または推薦でもいい  
ただし候補に挙げられた奴は辞退は認めん」

クラス代表？どうでもいいけど  
やるのは勘弁だな

「織斑さんを推薦します」

「ええ!?!」

ははは、一夏ドンマイ

「国崎くんを推薦します」

「私も!」

「はあ!?!」

やだよ、クラス代表やるの

「待ってくれ!僕はやる気は無いし」辞退は認めんと言ったはずだ  
「はい」

はあ、やだな

「では、クラス代表は国崎か織斑になるがいいか」

「お待ちになってください！」

「どうした？オルコット」

「クラス代表に私にならないなどどれだけ屈辱的な一年を過ごせとおっしゃいますの！？」

誰もそんなこと言っていない気がするけど

「そうか…！」

織斑先生が不適な笑みを

『来人、嫌な予感がしたね？』

「大当たりだよ、フィリップ」

「お前達、前決闘がどうといていたな」

織斑先生の言いたいことが分かった

「ならこれでつけばいい」

「やっぱり…！」

「ええ！それでいいですわ！」

「僕もそれでいいよ！」

「夏受けてたつとか言ってたしな」

「国崎はどうするんだ？」

「ああもう分かったよ！やりゃいいんだろ」

もう、どうでもいい

「なら試合は明日だ、いいな」

やっぱりついてない



## 第4話（後書き）

どんどん駄文に（汗）

ちなみに次は来人の部屋割の話にする予定なので  
試合はまた次の回に

感想などお待ちしてます

PV 7000 越えました

ありがとうございます！

## 第5話(前書き)

PV 10000越えました！

こんな駄文に

本当にありがとうございます…！

## 第5話

そんなこんなで  
放課後になった

「そついえば、宿はどうするの？  
僕達は寮だけど」

一夏が聞いてきた

「ん？そこらへんのビジネスホテルに泊まるけど？」

IS 学園は全寮制だが

男の僕が入った事により泊まる部屋が決まってるけどない  
だから自宅通いとなるのだがいちいち屋敷に戻るのが  
面倒なので父さんにホテルの予約を頼んでおいたのだ

「とりあえず、チェックインに行かなくちゃなんないから  
もういくわ」

「うん、分かった。また明日！」

「おう！じゃな！」

「後、その言葉使いに僕は似合わないよ」

「？分かった、変えとくよ」

喋りやすいんだけどな…

僕はバイクを取りに行った

「早くチェックイン済まさないとな」

「心配はいらんぞ？」

「うわぁ!？」

いつの間にか後ろに織斑先生が立っていた

「お前の部屋が決まったぞ」

「はぁ…泊まるのは明日からですよね？」

「いや、今日からだ」

「はい!？荷物とかは…」

「あの人が届けてくれたぞ」

「霧彦さん!？」

織斑先生が指を指した方向には冴子姉さんの許嫁  
須藤霧彦がいた

姉さんにパシリにされたか

僕の視線に気づいたのか手を降ってる

一様降り返す

満足したのか笑顔で帰っていく  
なんなんだあの人は

「ホテルはさっきの人がキャンセルしたそうだ」

「分かりました…はあ…」

ため息をつく

「部屋はここだ」

「はい、分かりました」

織斑先生から自分の荷物を貰い部屋へ行く

「1025室は…ここだ」

鍵を開けて中に入る

「いい部屋だな」

そう言うとシャワー室の方から誰かが出てきた

「君か？私のルームメイトはこんな姿で済まない」

「…」

僕は絶句した。だって…

「私は篠ノ之箒…だ…」

幼馴染みだったから  
ちなみにバスタオル一枚だけの姿

「来人！？お前ホテルじゃなかったのか！？」

「…」

「おい、来人？」

「…」

バタンツ！！

「来人！？どうした！？」

僕はそのまま気を失った

「う…う…ん…」

僕は目をさました

「来人！起きたか…良かった…」

「箒？ああ、僕は倒れて…ん？」

何か音が鳴った

箒の顔が赤い

「箒？」

「来人…飯を食べにいこう…」

「?ああ…」

それから道中に一夏に会った

「いいなあ、来人と同じ部屋なんて」

「?何で、僕と同じだったらいいんだ?誰と同じだったって一緒だろ?」

「来人は何も分かってない」

「ああ、分かってないな」

「なんだよ二人して」

食堂で飯を食べて部屋に戻った  
その際凄い女子に見られたが

「そういえば、克己さんはどうしてるんだ?」

克己と言うのは中学卒業まで僕のボディガードを  
してくれた人だ

「まあ、克己からは自分の身を守るために訓練して貰ってたし  
高校生になると自分で守れるだろうと父さんが辞めさせたんだ」

「そうか…」

「今何してるだろうな」

そんなことを話して僕達は寝た  
次の日はクラス代表決定戦というなの  
決闘がある

面倒な事にならないといいけど



## 第5話（後書き）

フィリップ『どうゆうことだ！僕の出番が無いじゃないか！』

来人「大丈夫だ、当分無いらしいから」

フィリップ『えっ！？』

感想などお待ちします

## 第6話（前書き）

IS の代表決めるのに

IS 使わない主人公って（汗）

## 第6話

決闘当日

僕は相手のIS の情報を見ていた

「ブルー・ティアーズ第三世代かあ…」

代表決定戦は第三アリーナで行っていた  
先に一夏とセシリアさんが戦っていた

「ほうほう、使い方によつたら悪くないIS かもな」

でも使い手があれだからなあ…

【国崎君準備をしてください】

「あ、行かなきゃ」

僕はピットに向かった

「あ！来人！負けちゃった…」

「序盤から飛ばしすぎだ」

腕は悪くないがな

「国崎、お前自分のIS はどうした」

織斑先生が言うのに対して

「ああ… 必要ないんで更衣室に置いてきました」

「ほう?」

「え！来人IS 無しで勝てるの」

「ああ！これがあればな」

来人は三個のくぼみがある物と三枚の青いメダルを取り出す

「それはなんだ?」

篤が聞くと

「オーズドライバーとコアメダルさ」

「?それで何するの?」

「まあ、見てな」

来人はそう言うとオーズドライバーの両端にメダルを入れると最後に真ん中にメダルを入れる  
メダルを入れた場所を斜めに傾け右腰に付いている  
オースキャナーと言う機械でメダルをなぞる

「変身!」

【シャチ！ウナギ！タコ！シャシャシャウタ シャシャシャウタ】

謎の歌が聞こえたあとに来人の姿が変わる

来人は仮面ライダーオーズシャウタコンボに変身した

「何それ？何あの歌！？」

「歌は気にするな」

「後これは仮面ライダーオーズ」

「オーズ？」

「じゃあ行ってくるわ」

「来人！」

篤が来人を呼び止める

「負けるなよ」

「おう！」

オーズは戦闘フィールドに向かう

「あら？それが貴方のIS ですか？」

セシリアが聞くと

「これはIS じゃないよ、だけど勝たせて貰っよー！」

「IS に勝てると思ってますの！？」

セシリアがライフルで撃ってくるが  
オーズは液状化で避ける

「この！くらいなさい！」

「悪いけど当たらないよ」

「ならこれならどうですか！？」

セシリアは四つのビットを放つ

「！？面倒な物を」

液状化で避けるが避けるので精一杯  
しまいにはライフルが当たる

「ぐあー！」

「今なら降参を認めてあげますわ」

「悪いけど勝たせて貰うって言ったよな？それに  
分かったぜビットの弱点も」

「なんですって！？」

ビットが攻撃する時セシリアは動かない  
セシリアが攻撃する時ビットは動かない  
つまりどちらか片方しか出来ないのである

「分かれば此方のもんだ！」

オーズは液状化で空高く飛び上がる

「無駄な事ですわ！」

ビットで撃ち落とそうとするが

「はあ！」

オーズの足タコレッグが八つに別れる

「はあ！」

ビット全てを壊す

そしてそのまま液状化でセシリアの前まで急降下する

「!?!」

セシリアはビットの操作で反応が遅れた

「あばばばばばば!?!」

再び分けたタコレッグでセシリアを叩く

シールドエネルギーもどんどん減っていく

「さて!これで決める!」

オーズはオーズドライバーをもう一度スキャンする

【スキヤニングチャージ!】

セシリアをウナギムチで拘束し

タコレツグを分けてドリル状にする

オーズシャウタコンボの必殺技オクトバツシュを決める

セシリアのシールドエネルギーは0になる

セシリアのISの展開が消え落下していく

「ちよっ…ちよっと!」

オーズをはドライバーのメダルを赤いメダルに変え  
スキャンする

【タカ!クジャク!コンドル!タ〜ジャ〜ドル〜】

オーズはタジャドルコンボになり

飛んでセシリアを受け止める

「お強いんですね、どうしたら貴方みたいになれますの?」

「僕は、強くないよ。唯、皆を守るためについて言ったら  
納得してくれる?」

「ええ」

(この方かも知れない、私の理想のお方)

セシリアはそのまま気絶した

「はあ、何とかなっただな」

来人は変身を解く



「だけど、コンボ2連発はキツ…イ…」

来人もそのまま倒れて気絶した

## 第6話（後書き）

ネタに走りすぎたなと思います（笑）

フィリップ『僕の扱い酷くないか！？』

扱いは気にするな

フィリップ『気にするよ！』

感想などお待ちしてます！

## 第7話（前書き）

今回凄く短いです

## 第7話

「来人」

う…うん

「来人！」

誰？

「いい加減起きろ！」

「わあ！？」

僕は誰かに叩き起こされた

「たく、お前はいつもこれだな」

「え…何で？」

僕は目の前にいる人に驚愕した

「克己…？」

「あ？なんだ？まだ寝ぼけてんのか？」

「いつ戻ったの？克己！」

「いつまで寝ぼけてんだお前は」

克己だった

「起きたなら行くぞ、飯の時間だ」

「うん、分かった」

僕は朝食を食べに行つた

だがおかしい。何故家にいる

僕はIS 学園にいたはずだけど

「ねえ、克己？」

「何だ？」

「何で僕は家にいるんだ？」

「

」

え？何て言ったの？

「！？」

声がでない！？

僕は歩くスピードが遅くなつていく

克己は気にせずどんどん進んでいく

何故か僕は走れない

待って！克己！僕何だか変なんだ！

克己！置いてかないで！克己！

「克己！！！！」

「！！！！？」

気がつくと保健室だった

「来人！大丈夫！？」

一夏が僕に言った

「大丈夫…少し…悪い夢を見ただけだから」

「そう？良かった」

一夏心配かけてごめん

「ですが…かなりうなされてましたわよ？」

「セシリアさん先に起きてたんだ」

「はい」

「だが見た所かなり悪い夢だったんだな」

僕の服は汗でびっしょりだった  
ていうかいつの間に着てたんだ？

「服は保健室の先生が着せてくれたんだよ？」

保健室の先生か〜ならいいk

「変に笑ってたけど…」

一瞬で鳥肌がたった

「何も…されてない…よな…？」

「う…うん！大丈夫だと思うよ！」

一夏達が変に焦ってる  
嫌な予感しかしないが

( )(言えない…メイド服着させられたとか絶対に言えない！写メ撮ったし…)( )

とりあえず食堂へ向かう事にした

## 第7話（後書き）

主人公の災難は面白いですね（笑）

来人「笑うなあー！！！」

フィリップ『出番をくれー！！！！』

感想などお待ちしてます



## 第8話（前書き）

悩んでる間にPV 20000越えました  
ありがとうございます！

## 第8話

「国崎くんクラス代表おめでとーカンパニー！」

「『『『『『カンパニー！』』』』』」

食堂では僕の代表決定パーティーが行われていた

「来人大丈夫？さつき起きたばかりなのに」

「大丈夫だよ、家のパーティーよりかは退屈しないし」

「そ、そうなんだ…」

すると一人の女子生徒が来た

「新聞部です！クラス代表になった国崎君にインタビューしに来ました！」

「はぁ…」

「で、国崎君！」

「はい」

それから何度か質問された

答えられなかった事は捏造するとの事

それで大丈夫なのか？新聞部

「大丈夫だ！問題ない！」

「はい！？」

「気にしないで、じゃあ最後に  
今一番会いたくない人は誰？」

代表関係ないじゃん

「若菜姉さんですかね…」

一夏と篤が頷いている  
流石幼馴染み

「ほう？それは何故？」

「なんとなく言うかブラコン」来人〜！「ええ！？」

何故若菜姉さんがここに！？

「会いたかったよ〜！寂しかったよ〜！」

「分かったからくつつくな！！」

皆がポカーンとしてる当たり前か

「こちら僕の姉の国崎若菜です」

「ハロー 皆ご存じ若菜ちゃんです」

否定はしない何故なら

「ええ！何で若菜ちゃんが!？」

「本物だ！本物の若菜ちゃんだ！」

「あれ？でもテレビで見るよりキャラが違うよつな…」

当たり前だこれは俺の前の時だけのキャラだからな  
それに若菜姉さんは人気アイドルなのだ

「お久しぶりです、若菜さん」「

「ああ？一夏ちゃんに篤ちゃん？何？まだ来人に付きまとってるの？」

「付きまとってるのは若菜さんの方じゃないですか？弟離れ出来ないのに」

「言ってくれんじゃない」

何やってんだか…

「ん？母さん？」

来人へ

若菜そつちにいない？

いたら連絡して

母より

「母さん…ビンゴだ」

母さんへ

若菜姉さんこっちにいるよ  
すぐに連れ帰って！

来人

「これで大丈夫だね」「若菜！」「早っ！！」

「お母様！？」

「「文音さん！」」

「あらー夏ちゃんに箒ちゃん！久し振りねえ」

「お母様！何でここに！？」

「それはこっちのセリフよ！早く帰るわよ！」

「嫌です！まだ来人と居たいです！」

「駄々こねない！」

母さんが僕を見てる

何をすればいいかは分かった

「若菜姉さん…」

「来人！来人もまだ姉さんと居たいよね？」

「帰れ！迷惑だ！」

「!？」

「若菜」

「はい…帰ります…」

姉さんは帰っていった

姉さんに言うことを聞かせるにはあれが一番の方法なのだ

「はい…あれが会いたくない理由です…」

「分かりました…」

「じゃあ写真を撮りますので国崎君とセシリアさんは並んで」

「はい」

「あ／／／はい／／／」

（並んで撮る…二人だけ…）

「セシリアさん？顔赤いよ？」

「いえ！何でもありませんわ！」

「ムッ…」

「もうちょっとよってくれるかな？」

すると筈が僕の隣に座った

「ちよつと貴女！」

その後に一夏が僕に後ろから抱きついた

「貴女まで！」

「？写真は皆で撮った方が楽しいじゃん」

「だよね〜」

「だからって抱きつくのは！」

何焦ってるんだろ？

「昔からだし気になんないけど」

「昔から…」

セシリアさん、ショック受けてるみたいだけど大丈夫かな？

「もう撮っていいかな？」

「あ、はいどうぞ」

「じゃ、はいチーズ！」

結局クラスの子全員が入った

セシリアさんは不機嫌だったどうしたんだろ



## 第8話（後書き）

若菜姫のキャラをぶっ壊してしまったOTL  
後悔は無い

感想などお待ちしてます

国崎一家 + 紹介（前書き）

国崎の家族も出揃った所で紹介です

## 国崎一家 + 紹介

国崎家

国崎龍兵衛

来人の父

国崎財閥会長

本家の方と性格は結構似てる

国崎の中で怒らせると一番恐い

だから国崎家の誰も彼に逆らえない

かなりの愛妻家

家族が一番大事な性格

国崎文音

来人の母

財団X社長

何処にでもいる母親な感じ

財団Xという企業の社長でもある

かなりの神出鬼没

凄い美人らしい

国崎冴子

来人の姉

国崎財閥社長

龍兵衛に認められ若くして社長になった凄い人

織斑千冬と篠ノ之束の幼馴染み

須藤霧彦という許嫁がいるが少し不満

昔ISに乗っていた事がありかなり強い

隠しているが軽いブラコン

国崎若菜

来人の姉

人気アイドル

重度のブラコン

来人のIS学園入学を最後まで反対した

基本的に来人に気がある女は皆嫌い

だから一夏と篤が嫌い

テレビでは清純な感じ

来人の前では鬱陶しいほど来人にベタベタ

来人が罵倒すると大人しくなる

霧彦が嫌い

関係者

須藤霧彦

冴子の許嫁

財団Xの幹部

龍兵衛には認められず

冴子にはパシリ扱い

若菜には毛嫌いされ

不遇な人

だから普通に接してくれる文音と来人を

慕っている

実はMっ気があつたり無かつたり

大道克己

来人のボディガード

元自衛隊

来人に凄く慕われている

来人に格闘を教えた人物

千冬と面識がある

来人が中学の卒業と同時にボディガードを辞める

現在行方不明（来人は知らない）

鳴海翔太郎 / 仮面ライダーW

## 来人の親友

作者がWを出させる為に出たキャラ（オイ  
色々ともてる来人とは違い全然モテない  
名前から分かるかも知れないが

父は探偵で妹がいる

ちなみにハードボイルダーの名付け親

## 第9話(前書き)

今回は、ライダーメインです！

## 第9話

ある日の放課後

「ねえ、来人今度の日曜日買い物に行かない？」

一夏が喋りかけて来た

「別にいいけど…何で小声？」

「篝ちゃんとセシリアさんに聞かれたら嫌だからだよ」

「何で嫌なんだ？別に聞かれてもいいだろ？」

「やっぱり何にも分かってない…」

一夏がため息をついた

何で？女はわからん

「すでに聞こえているが？」

後ろを向くと篝が変なオーラを出していた  
地味に怖い

「買い物か、私もついていこう」

「ダメだよ！絶対ダメ！」

「抜け駆けは許さんぞ一夏」



「でも…」

何話してんだろ？

「来人、私も一緒に行ってもいいか？」

「!？」

(まずい！来人に話を振ると！)

「別にいいんじゃない？」

(やっぱり…)

箒は喜んで一夏は落ち込んでる  
どうしたんだ？

当日

僕は二人より早く来ていた  
箒は僕より先に部屋を出ていたはずだが  
待ってる間に何回かナンパされた

『リア充爆発しろって奴だね』

「どづいつことだ、フィリップ」

「来人、お待たせ」

「待たせたな」

「大丈夫、行こうか」

それから色々行った

何故か男に僕がナンパされた

『これもリア充爆発し』『多分違うぞ』…』

「それじゃあ、お昼ご飯食べに行こうか」

何だかんだで楽しそうだった良かった良かった

「ま…待て！」

「「「「？」」」」

僕達が振り返るとオタクっぽい人が立っていた

「この場面何処かで…」

「同志がやられたが俺はそうは行かない！」

【マナー！】

オタクっぽい人はマナードーパントに変わる

「お前だけにいい思いはさせない！」

「はぁ…やっぱりドーパントか…」

『やるのかい？』

「ああ、行かせフィリップ」

『了解した』

「来人…」

「安心して、後隠れてて」

「分かった」

一夏と箒が隠れたのを確認すると  
ダブルドライバーを付け  
ジョーカーメモリを起動する

【ジョーカー！】

【サイクロン！】

「『変身』」

二本のメモリを差し込み倒す

【サイクロン！ジョーカー！】

来人は仮面ライダーWサイクロンジョーカーに変身する

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

そう言うとマネードーパントに殴りかかる

「はあ！」

だが余り効いていない

『来人！ここはヒートメタルだ』

「ああ！」

Wは二本のメモリを抜き赤いメモリと銀のメモリを差し込む

【ヒート！メタル！】

Wはヒートメタルにフォームチェンジする

そして背中に付いているメタルシャフトを構える

「はあ！おらあ！」

「ぐはあ！」

マネードーパントは膝をつく

『来人、メモリブレイクだ』

「ああ」

メタルメモリをメタルシャフトのマキシマムスロットに差し込む

【メタル！マキシマムドライブ】

「『メタルブランディング！』」

マナードーパントは爆発しメモリが砕ける

Wは変身を解く

「終わったか…」

『いや、まだだ』

「来人！キヤア！」

一夏と箒の近くに緑の雷が落ちる

「!?!」

「オーズ！俺のメダルを返せ！」

「ウヴァ、やり過ぎよ」

ウヴァと呼ばれた怪人は辺りに雷を落としていた  
下手すれば人に当たるくらいに

『あれはグリードのウヴァとメズールじゃないか』

「…」

『来人？どうしたんだい？』

「…許さない」

来人はオーズドライバーを付け  
メダルを三枚入れオースキャナーでなぞる

「変身」

【タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ】

来人は仮面ライダーオーズスタトバコンボに変身する

「出たな！オーズ！俺のメダルを返せ！」

ウヴァがオーズに突進するが

「イダダダダダダダ！」

オーズがウヴァにとつもない力でアイアンクローをしていた

「誰？こんな事したの…」

「ウヴァです！ウヴァでございます！」

オーズの殺気に負けて変な敬語になるメズール

「へえ、君がしてたんだ」

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

地面から二枚コアメダルが出てくる

オーズはそれを取り

ベルトの二枚と交換する

【タカ！イマジン！ショッカー！タ〜マ〜シ〜 タマシ〜 タマッ  
シ〜 ライダ〜魂】

オーズはタマシーコンボに変わる

『「何それ！？」』

「イダダダダダダダダ！」

ウヴァを掴んでいる力が強くなる

「ダメじゃないか……」

「ギヤアアアアアアアア！」

お仕置きタイム

「もうこんな事しない？」

「はい！しません！二度としません！」

「メズールも？」

「絶対しません！」

「そう？ならよかった」

オーズは変身を解き

一夏と箒の所へ行く

「待たせたね 行こうか」

「う…うん」

（（完全復活とか考えるの辞めよう…殺される！））

心に誓ったグリード二匹でした



## 第9話（後書き）

この小説のグリード設定は

まだウヴァとメズールしか復活してません

タマシーのお仕置きはご想像にお任せします（笑）

フィリップ『久し振りの出番だあ〜！』

やったね！フィリップ！

感想などお待ちしてます！

第10話(前書き)

PV300000越えました

ありがとうございます！

## 第10話

次の日

「おはよう」

「あ、国崎君！おはよー！」

何か教室が騒がしいな

「騒がしいけどどうかした？」

「2組に転校生が来たんだって！」

へえ、転校生か

「そんな事よりもすぐクラス代表戦だろう？」

篤…そんな事って…

「でも、大丈夫なんじゃない？」

「一夏、油断大敵と言っただろう？」

「でも専用機持ちは四組だけだった」

「バカかその四組と当たったらどうすんだよ」

「バカって言うな！」

食いつくとそこかよ…

「その情報古いよ」

「ん？」

僕達は声がする方へ向いた

「「鈴（ちゃん）！」」

「ヤッホー来人、一夏」

「転校生って鈴の事だったのか」

「そう言うこと」

鈴と喋っていると篝の視線が痛い何で？

「来人、そいつは誰だ？」

初対面の人にそいつは無いだろ…

「仕方ないか、篝と入れ違いで入って来たからな

こいつは鳳 鈴音 サード幼馴染みで中国の代表候補生だ」

「そ、来人の幼馴染みで中国の代表候補生…って知ってたの!？」

「うちの情報網なめんなよ？」

「ああ…そうだったわ…」

納得したか、さすが幼馴染み

「で、来人サード幼馴染みって何？」

「順番だよ、一夏がファーストで篤がセカンドで鈴がサード」

「良くわかんないけどいつか」

「で、鈴は何しに来たんだ？まさか2組の代表になって  
宣戦布告しに来たとかか？」

「大当たりよ…とにかく！相手があんたに決まったから！」

スパコーン！！

「痛い！って千冬さん…」

「教室の前で騒ぐな後織斑先生と呼べ馬鹿者」

「はい…来人！代表戦覚悟しなさいよね！」

「いいぜ、負ける気ねえから」

「早く席につけ、HRを始めるぞ」

第10話（後書き）

何か終わり方グダグダな気が（汗）

感想などお待ちします！

第11話(前書き)

シャルルを出したい  
今日この頃です

## 第11話

「おりゃあー！」

「おつと…」

今来人はクラス代表戦で鈴と戦っている

『だがあつた後にいきなり代表戦とは作者の手抜きが分かるな』

「フィリップ、メタ発言は辞めよう」

『来人、あれが来るぞ』

「ああ」

来人は一瞬で移動する

「もう！何で当たらないのよ！」

「だから衝撃砲は当たらないって言っただろ」

『当たる確率は0だ』

ちなみに来人は自分のISを使っている  
使つと言ったときフィリップは（機械だから分からないが）  
泣いて喜んだらしい



「この！」

鈴は双天牙月を構え突っ込んでくるが  
来人はプリズムビッカーで受け止める

『芸がない…』

「もう決めるか？」

『いや、待て…』

「どうしたの？フィリップ」

『！来人今すぐそこから離れる！』

来人は鈴を蹴り自分も即座に離れる  
するとさっきまでいた場所に光線が降りかかる

「「！？」」

その後に見知らぬISが入ってくる

「何？あのIS」

「あの、何故このような事をしたんですか？」

『来人、話しかけても無駄だ』

「何で？」

『あれは無人機だ』

「!?!」

ISは来人に光線を放つ

来人はプリズムビツカーで受け止めるが

「ぐあ!」

弾き飛ばされる

「来人!」

「大丈夫だよ、心配しないで」

『来人』

「ああ、少し本気を出そう」

【エクストリームモード起動します】

来人のISダブルが緑色に光る

これは2分だけ全性能を引き上げる

ダブルの単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）  
エクストリームモードだ

「行くぞ!」

来人はプリズムソードを抜き

無人ISに突撃する

無人ISは来人に砲撃するが  
来人は全て避ける  
そして無人ISの腕を切り落とす  
すると来人に至近距離で砲撃しようとする

「!?!」

『緊急回避だ!』

【エクストリームモード終了します】

「ダメだ、間に合わない!」

来人は砲撃をくらう

「ぐあ!」

『来人!』

「大丈夫…!」

ドオン!!

「!?!」

鈴が無人ISに衝撃砲を当てる  
それに反応して  
鈴に砲撃する

「!?!」

鈴は目をつぶる  
だが砲撃の衝撃は来ない  
目を開けると

「来人！」

来人が身をていして守っていた

「大丈夫？」

『だがどうする？』

「いちかばちかエクストリームモードでファイナリユージョンだ」

『無茶だ！唯でさえ二回目のエクストリームモードは危険なのに  
一度も成功したことがないエクストリームモードのファイナリユ  
ージョン

なんて危険すぎる！』

「物は試しだ！」

『止める、止めてくれ！！』

【サイクロン！ヒート！ルナ！ジョーカー！マキシマムドライブ】

【エクストリームモード起動します】

「うおおおおおー！」

来人は一瞬で無人ISに近寄り

「ビツカーファイナリユージョン!!!!」

ビツカーファイナリユージョンを決める

無人ISは吹っ飛ばされ壁に激突する

「はあ…はあ…」

【エクストリームモード終了します】

「うぐっ!!」

『来人!』

「だ…大…丈夫…」

『フラフラじゃないか!だから止めるって…』

すると無人ISが動く

「あいつまだ動いて」

無人ISのからだ光る

『あれは…まさか自爆!?!』

「なら止めないと!メタルのファイナリユージョンなら」

『止める!今度は死ぬかもしれないぞ!』

「守って死ぬなら本望だ！僕はこの手で守れるなら  
全力で守りたい！」

【サイクロン！ヒート！ルナ！メタル！マキシマムドライブ】

「うおおおお！」

来人は無人ISに突っ込む

う…うん…

『悪魔と相乗りする勇氣あるかな？』

これは…

「これで誰かを守れるならやってやる！」

ビギンズナイト…

「うん…」

「これは不味いですよ」

「とかいいながら写真撮ってるじゃない？織斑さん」

「ん？」

来人は保険室で寝ていた  
ミニスカのセーラー服を着せられて

「何じゃこりゃあああああ！！！」

「あ、起きた」

『来人、大丈夫か？』

「ああ…て、何だこの格好！！！」

「来人、大丈夫だ可愛いぞ」

「全然嬉しくない！！！」

かなりキレる来人

「大丈夫だよ！ニーソは正義だよ！」

「意味わかんねえよ！！！」

次の日

「全く昨日は……」

「アハハ……ごめんって……」

「皆さん、今日は転校生を紹介します」

転校生が入ってくる

「何！？」

僕は驚いた

「シャルル・デュノアですよろしくお願いします」

「……男！？」「……」



男  
だ  
っ  
た  
か  
ら

第11話（後書き）

やっとシャルルが出せる（笑）  
何かすいません

来人「鈴に手を抜いてたよな」

うん、それは認める

フィリップ『後半空気だったからね  
それと後でどうなっても知らないよ』

え？

感想などお待ちします

## 第12話(前書き)

来人「あれ？作者居ないぞ？」

フィリップ『後で分かると思うよ』

## 第12話

「シャルル・デュノアです  
皆さんよろしくお願いします」

「「男!?」」

クラスに男が転校してきた

「はい、僕と同じ境遇の人がいると聞きましたので」

「きゃ……」

(やべっ！耳線用意)

来人は耳線を付ける

「キヤアアアアア!!!」

バリーンッ!!

耳線が碎け散った

「ええ……」

「二人目よ！二人目！」

「しかも中々のイケメン！」

「神様！このクラスにしてくれてありがとう！」

色々騒ぐ女子一同

「静かにせんか、馬鹿者」

教室は一気に静かになる

「じゃあボーデヴィツヒさんどうぞ」

「…」

「挨拶しろ、ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

するとラウラは一夏の方へ向かう

ラウラが一夏に平手打ちしようとしたが  
来人に止められる

「なにやってんの？ラウラ」

「貴様は？」

「国崎来人だよ、分からない？」

ラウラは頭を抑え考える

「いや、分からない」

「なら、これで分かる？大道克己」

「貴様！大道教官の居場所を知っているのか！？」

ラウラが来人の胸ぐらを掴む

「落ち着いて、今何してるか僕も知らないんだ」

「そうか…」

「話は済んだか？なら早く席につけ」

休み時間

「来人、あのボーデヴィツヒさんの事知ってるの？」

「うん、まあね」

姉さんのドイツの出張について行って  
空いた時間に克己に格闘を教えて貰っていた時に  
自分も教えて欲しいって来たのがラウラなんだ

「そうなんだ」

-  
-  
-

「国崎来人君だよね？」

シャルルが来人に話しかける

「そうだけど急いだ方がいいよ」

「えっ…」

「あ、来た！行くよ！」

来人がシャルルの手を掴み走り出す

「えっ／＼／」

シャルルは頬が少し赤くなるが来人は気がついていない

来人とシャルルが走っていると

トトトトトトトトトトトツッ！！

「いたわ！国崎君にデュノア君よ！」

「きゃ〜手を繋いでるわ！」

「あ、あれはあれでいいかも」

「だったら国崎君が攻めでデュノア君が受けね！」

何か危ない事を言われた気がしたが

来人は気にしない事にした

何とかアリーナの更衣室にたどり着き

「先行つてて僕は後から着替えて行くから」

「なに言ってるの？遅れるから今着替えた方がいいよ」

「う…うん、着替えるよ！だから後ろ向いてて？」

「？分かった」

授業が終わりシャルルが先に帰っていった

一夏と教室に帰っている途中

「ねえ、あれって鈴ちゃんじゃない？」

「ああ、そうだな…な…」

鈴は双天牙月を持って何かを引きずっていた

「フフフのフー」

「ねえ、あれって…」

「気にしないでおこっ…」

『来人、あれは…』

「言っちな…！」

-  
-  
-

教室に戻ると鈴が箒に



「アハハ！来人を好きなのは私以外いらない！」

「何するんだ！」

切りかかっていた

「やめろ！何してるんだ！」

来人は鈴を引き離す

すると鈴の姿がシャムネコヤミーに変わる

「ヤミー！？」

『今までにないヤミーだな』

来人はオーズドライバーを付け

コアメダルを入れる

「変身！」

【タカ！トラ！チーター！】

来人はオーズ タカトラーターになる

「とりあえず鈴を助けないと！」

オーズはシャムネコヤミーと外に出て戦う

「あれはヤミー！？」

「シャルル！？逃げて！」

「大丈夫！」

シャルルは何かを取り出す

「それは、バーストライバー！？」

シャルルはバーストライバーを腰に付け

「変身！」

セルメダルを入れダイヤルを回す

カポーンと言う音と共にシャルルの姿が変わる

シャルルは仮面ライダーバースに変身する

「シャルルがバース！？」

「早くヤミーを倒さないと！」

「待ってくれ！中の鈴を助けないと！」

「それなら僕に任せて！」

バースドライバーにセルメダルを入れダイヤルを回す

【キャタピラレック】

バースがキヤタピラレッグでヤミーのセルメダルを  
削り鈴が見える

「今だよ！」

「ああー!!」

チーターレッグで加速し鈴を助ける  
すると

「オーズ、僕のコアを返して」

『君は誰だ?』

「僕はグリードのカザリ」

『見る限り黄色のグリードか』

「…」

オーズはずっと黙っている

『来人?』

「ねえ、あのヤミーは君の?」

「そうだけど?」

「へえ…君のなんだ…」



タマシーのお仕置きタイム

.....

「ヤミーは作っただらダメ、分かった？」

「はい……」

「聞こえないなあ……」

「はい！二度としません！」

「分かればよし」

来人はから殺気が無くなる

「シャルル、教室に戻ろうか」

「う…うん」

来人とシャルルは教室に戻る

ヤミーはタマシーのお仕置きの時に巻き込まれ  
数秒でやられた

カザリは散らばった自分のコアを拾う

ウヴァは……

○くだから行ったんだ！

コアだけになっていた  
ヤミーのセルメダルで復活し  
自分のコアを捨てる

「完全復活は止めて言ったの分かった気がする……」

「だろ?…」

第12話（後書き）

：

来人「完全にやられてるな」

フィリップ『どうなっても知らないって言ったのに』

来人「代わりに言うけど感想などお待ちします」

## IS設定(前書き)

来人のIS設定です



## IS設定

ダブル

世代不明

所持者国崎来人

待機状態 右腕に付いている

形はエクストリームメモリ

姿 仮面ライダーダブルサイクロンジョーカーエクストリーム

エクスファイラーの所は耳の後ろにある

展開した時ISスーツが銀色になる

本来ISにガイアメモリを搭載するのは危険と判断され

禁止されていたがダブルには七本のガイアメモリが

搭載されている

篠ノ之束いわく現時点でのISの中では最強

篠ノ之束でさえも第何世代なのか分からない

何故か人工知能システムがあり

名称は『フィリップ』

プリズムビッカー

ダブル専用武器

盾から剣プリズムソードを抜くことができる

更に四つのマキシマムスロットがあり

そこにガイアメモリを入れる事で必殺技のバリエーションが代わる  
ただし必ずマキシマムスロットには『サイクロン』『ヒート』『ル

ナ』の

メモリを入れなければならない

必殺技

プリズムブレイク

ビッカーチャージブレイク

『サイクロン』 『ヒート』 『ルナ』 『ジョーカー』 『固定

ビッカーファイナリリユニオン

『サイクロン』 『ヒート』 『ルナ』 『ジョーカー』 『攻撃系

『サイクロン』 『ヒート』 『ルナ』 『メタル』 『防御系

単一仕様能力 (ワンオフ・アビリティー)

エクストリームモード

ダブルの全性能を倍以上に引き上げる

ただしタイムリミットがあり時間は二分

二回以上使うと体にかかなりの負担が出るため

来人も本気以外では使わない

## IS設定(後書き)

七本目のメモリはラウラの所らへんで出ます

## 第13話(前書き)

オーズが終わった…  
フォーゼが始まるのが楽しみです

### 第13話

シャルルが来て部屋割りが変わり  
シャルルと同室になった  
筈はかなり不機嫌だったが

自室にて

来人はシャルルと話していた

「シャルルがバースの装着者だったんだね」

「うん、そうだよ」

「まさか僕の作ったバースドライバーが  
デュノア社に行ってたなんて…」

「え？あれ来人が作ったの!？」

シャルルが驚く

「うん、セルメダル使ってた時に  
セルメダルだけでも戦えないかなと思ってね」

「そうなんだ…」

「ああ…シャルルにこれ渡しとくよ」

来人がシャルルに銃の様な物を渡す

「これは？」

「バースの専用武器バースバスターだよ」

「バースバスター……」

「使い方は説明書があるから読んでね」

来人は説明書を渡す

「うん、分かったよ」

シャルルは説明書を受けとる

「じゃあまた後で！」

「うん！じゃあね！」

来人は先に部屋を出る

『説明を丸投げしたね？』

「フィリップ、余計なことは言わない  
ジャンクにされたいの？……」

『…最近僕の扱い酷いよね……』

- - -

授業が終わり

お昼休み

「来人！」

「どうしたの？ 箒」

来人は食堂に行く途中箒に声をかけられる

「あの…な…昼を一緒に食べないか？ 屋上で」

「いいけど…食べる物はなにもないよ」

「心配はいらん！ 弁当を作ってきた！」

「分かったから、近すぎだよ…」

「！す…すまん／＼」

そんな二人の話を影から聞いていた三人がいた

-  
-  
-

「いや〜奇遇だね」

「何が奇遇だ…」

「何か言った箒？」

「別に…」

来人と箒が屋上に向かう途中

一夏とセシリアと鈴に合い  
さらにシャルルに合った  
来人は皆で食べようと言ったら  
箸が不機嫌になった

「僕が来てよかったのかなあ？」

「いいよ！大勢で食べた方が美味しいし」

屋上につき昼食をとった

来人は箸の手作り弁当を開ける

「凄いなあ、箸料理出来るんだ

うん、うまい！」

「そ…：そうか」

すると鈴がタツパーを開ける

中身は酢豚だった

「来人！昔私の酢豚食べたって言ってたよね！」

「もしかして作ったの？」

「そう！」

「じゃ、いただきます

うん、うまい！」

するとセシリアが



「来人さん！わたくしもサンドイッチを作りましたの！  
食べてくださる？」

「うん、いいよ」

来人はサンドイッチを食べる

「うん、不味い！」

「ええ！？」

「『『『ええ！？』』』」

セシリアは来人に不味いと言われ驚き  
他は別の意味で驚いていた

「ちょっと！それはないよ！」

「アンタデリカシー無さすぎよ！」

「でも正直な感想だし…あ、そうだ！セシリア！」

「…はい？」

「今度の休みに料理練習しようか！  
僕が見てあげるからさ」

「はい！…！」

（見てあげる…二人っきり…）

（（（まずい！）））

「「「来人！私にも料理教えて（くれ）！」」」

三人の声が重なる

「え？来人料理出来るの？」

「うん、出来るよ」

「来人は調理実習は逆に教えてたからね…」

一夏が呆れた感じに言う

「今度シャルルに何か作ってあげるよ」

「え？いいの？」

「うん、あつ箒唐揚げ無いじゃないか！」

「いやっいいんだ…」

「駄目だ！僕だけあるなんて不公平じゃないか！」

ダイエットしてるとは言えない箒

「ほらあげるからアーンして！」

「え／＼／あ…アーン／＼／」

箸は赤くなりながら唐揚げをアーンで食べる  
羨ましそうに箸を見つめる三人

「あはは…」

「シャルルはそれで足りる？」

シャルルが苦笑すると来人が話しかける

「え？」

「次の授業は織斑先生だから倒れられたら困るからね」

若干（？）暴走気味な来人はシャルルに鈴の酢豚をアーンで食べさせようとする

「いいよ！僕はお腹いっぱいだし」

「いいからいいから」

「う…うん」

完全暴走な来人に流されアーンで食べたシャルル  
言うまでもないが顔は赤かった

- - -

昼食を食べ終わった後  
授業が終わり

「国崎、少しいいか？」

「あ、はい」

来人は千冬に呼ばれる

「シャルル、先にシャワー使っていていいよ」

「うん、分かった」

「何ですか？織斑先生」

「ああ、大道の事だが…」

「克己がどうしたんですか？」

「ボーデヴィツヒは大道の名前を聞いて焦っていただろう」

「はい、確かに」

「お前は知らないと思うが実は大道克己は行方不明だ」

「え！？」

「お前のボディガードを辞めてから  
消息を絶っている」

「そ…んな…」

来人は座り込む

「言うことはそれだけだ部屋に戻れ」

「…はい」

- - -

何で克己が…どうして…

来人は何度も考えながら部屋に戻る

「あ…そういえばシャンプー切れてたな」

来人は棚から新しいシャンプーを取りだし  
洗面所に行く

「シャルル、シャンプー切れてたろ」

するとシャワールームの扉が開く

「タオル忘れてたなんて…来人が帰ってくる前に  
取りに行かない…と…」

「「え？」」

中から出てきたのは女の子だった

### 第13話（後書き）

シリアスっぽいのは少し苦手です

来人「克己が…克己が…」

フィリップ『放っておいて来人のステータスに新しい物が加わったな』

料理上手ですね

料理となると来人は少し暴走します

フィリップ『そうか…じゃあ逆に来人は何が苦手なんだ？』

来人君の苦手な物はナメクジです

フィリップ『ナメクジか…』

ナメクジと言っても普通とは少し違うんですがね

フィリップ『？どう言うことだ？』

まあこんなナメクジが嫌いです

ピッコロ「何処だ？ここは」

来人「あ…あ…」

ピッコロ「何だ？」

来人「イヤアアアアアア！ナメクジ人間ンンンンンンンン！」

【プテラ！トリケラ！ティラノ！

プット ティラ〜ノ ザウル〜ス】

フィリップ『ええ！？まだ出てない

プトティラコンボに！？』

ピッコロ「何だ？あれは！？」

オーズ「イイイイヤアアアアア！」

【プット ティラ〜ノ ヒッサ〜ツ】 ストレインドウム

ピッコロ「ギヤアアアアア！」

フィリップ『よくよく思ったらあの人ナメクジじゃないからね！！』

ナメッコ星人です

来人「はあ…はあ…」

来人君が落ち着いた所で今回はおしまいです

感想などお待ちしてます！

ピッコロ「なんなんだよ、ありゃ…」





## 第14話(前書き)

最近オーズ寄りになってる気がする…

## 第14話

「「え？」」

同時に声を出す二人

「う…うわあっ!？」

シャルル（？）は体を隠す

「シャ…シャルル、シャンプー切れてたろ」

「あ…うん、ありがとう…」

シャルルにシャンプーを渡すと  
洗面所を出る

「シャルル…は…女…？」

ボタンッ!!

来人はそのまま気絶する

-  
-  
-

目が覚めるとベッドで寝ていた

「あ、起きたんだ  
びっくりしたよ倒れてたからさ」

「ああ、ごめん…なあ、シャルル  
何で男装なんかしてたんだ？」

「…あのね、僕は本妻の娘じゃないんだ」

「え？」

シャルルの言った事に驚く来人

「僕はね、愛人の間に産まれた子なんだ  
2年前にお母さんが亡くなって

デュノアに引き取られたんだけど

そっちの人は僕を受け入れてくれなくてね  
それからずっと僕の居場所は無かったんだ」

「そんな…」

「バースの装着者選ばれたのも  
自分の娘に危ない事はやらせないって理由で  
僕は娘にも思われて無かったみたい」

そう無理に笑うシャルル

「それに今デュノア社は  
経済危機になってるんだ」

「えっ!？」

「驚くのも無理は無いよね

デュノア社は第二世代は作れても

第三世代が作れなくてね

そこで来人のニュースが全世界に放送されて

父はそれで僕にIS学園に行くように言ったんだ

注目を浴びる為に男性IS操縦者としてね

来人のISダブルのデータを盗む為にね

でもそれは失敗した

来人にバレちゃったし

デュノアはこのまま潰れるだろうね

まあ、もう僕には関係無いけど」

「シャルルはこれからどうなるんだ？」

「僕はフランス政府に捕まって

代表候補生を剥奪されて

牢屋行きだろうね」

「ふざけんなよ…」

来人の手が震える

「来人？」

「好き勝手に使われてそれで牢屋だと…

シャルルは物じゃねえんだよ！

そんなの悲しすぎるだろ…」

「来人！良いんだよ、僕は」

「良くねえよ、それにお前はフランスに連れて行かせない」

「え？そんなの無理だよ！」

『そんな事はない』

『IS学園特記事項に書いているだろう？』

「あ！」

特記事項の中に【IS学園在学中は他国の干渉を禁じる】  
と言う項目がある

「という事は後3年間捕まらなくて良いつて事だ  
3年もあつたら何か方法が見つかるだろ？」

「じゃあ！」

「ここに居て良いんだよシャルル」

「うん！ありがとう、来人！」

シャルルは来人に抱きつく

「あ…シャルル…」

「何？」

「胸が…当たってるんだが…」

「え！？」

シャルルは来人からすぐに離れる

「……」

「シャルル？」

「来人の、えつち……」

「……！そういう意味で言ったんじゃない！」

「……」

「夕食貰って来るよ」

その姿じゃ食堂には行けないだろ？」

「うん、じゃあお願いするよ」

「……」

食堂に行っている途中

「来人！」

「ん？どうした、一夏？」

「一緒にご飯食べようよ！」

「悪い、シャルルが気分悪い見たいでさ  
今日は部屋で食べるんだ」

「ふん、分かった、じゃあね！来人！」

「ああ」

食堂に行き夕飯を取ったシャルルは…箸で良かったかな？

――

自室

「シャルル、持ってきたぞ」

「うん、ありがとう…うっ！！」

「どうした？箸は苦手か？」

「れ…練習してはいるんだけどね…」

「じゃあフォークにするか？貰って来るよ」

「だ…大丈夫だよ！」

ポロツ…ポロツ…

「あ」

「ハア…シャルルはもっと甘えても良いんだぞ？」

「じゃ…じゃあね…」

「何？フォークか？」

「来人が食べさせて？」

「ええっ！？いや、それはなんと云うか…」

「来人が…甘えても良いって言ったから…」

シャルルは上目遣い＋涙目で言う

「…！…分かったよ」

来人は魚をつまみ

「はい…アーン…」

「アーン…美味しい」

「そ…そうか…」

「次は、和え物がいいな」

「和え物だな」

そんなこんなで食べ終わる

「ハア…ハア…」

(心臓破裂するかと思った…)

お弁当の時とはまるで別人である

-  
-  
-

来人は眠っている



「ありがとう…来人…  
僕、ここに残る事にするよ」

そして来人のおでこにキスをする  
そしてシャルルは赤くなる

(は…恥ずかしい事しちゃったな…  
もう寝ちゃおう！)

そして夜がふけていった

## 第14話（後書き）

シャルルの話がうる覚えです  
特記事項もうる覚えです

来人「まさかシャルルがあんな事をさせるなんて……」

フィリップ「まあ、いいじゃないか

来人も前にやらかしたんだし」

来人「…そうだけど」

もう一回呼ぶ？

フィリップ「絶対やめろ！」

冗談ですよ

感想などお待ちしてます

番外編 料理と合成と宇宙キタ……!!

(前書き)

フォーゼの小説をしようか  
検討中です

番外編 料理と合成と宇宙キタ……!!

「メズール」 (泣)

「はいはい、泣かないのガメル  
ありがとうね、オーズでWの坊や」

「あ、はい」

「来人、待たね」

「うん、バイバイ」

何故こうなっているかと言うと

怪人体のガメルがIS学園でうろろろしていたので  
メズールに連絡して

(何故連絡出来たとかは気にしてはいけない)  
メズールが来るまで遊び相手になっ  
たらなつかれ仲良くなった

「ガメルって子供みたいだね」

『みたいじゃなくて子供だけだね』

- - -

食堂

「じゃあ始めようか」

「……はい!」

食堂では来人の料理教室（？）が始まった  
最初はセシリアだけだったが  
後から一夏、箒、鈴の三人が加わった  
シャルルも来ていたが来人の手料理を食べる為である

「まずは何でもいいから作りたい物を考えてね」

四人に紙と鉛筆を渡し調理に取りかかる来人

「調理しながらで良いのかな?」

苦笑いするシャルル

「来人はマイペースだからね……」

――

「皆出来た?」

と言ってシャルルの前に作りたてのハンバーグを置く

「ねえ……フィリップ……」

「なんだい?シャルル・デュノア」

「これ……時間って何分かったの?」

「約2分だよ」

「2分でハンバーグは出来るの？」

『普通は不可能だ、来人は異常だが…』

「だよな…」

再び苦笑いするシャルル

「来人さん！出来ましたわ！」

「私も、出来たぞ！」

「あ、うん今行くよ！シャルルはこれ食べてて」

「うん、分かった」

セシリア達の方へ行ったのを見た後にハンバーグを  
食べると

「えっ…？」

シャルルは絶句した

とても2分で作ったとは思えないほど美味しいのだ

「嘘…今まで食べた料理の中で一番美味しい…」

『だから来人は異常なんだ』

-  
-  
-

「ん〜？どれどれ？」

「一夏は美味しい卵焼きや美味しい肉じゃがなど  
前の文字が気になる物を書いていた」

「一夏は美味しい物作れると思うけど…」

「それでも教えてほしいの！」

「そう…」

「箸は和食が多かったが刺身などが  
入ってあった」

「これはさばくの？盛り付けるの？」

「どっちもだ！」

「「めん、無理だよ…」」

「鈴は餃子や炒飯などを書いてあった」

「酢豚しか作れなかったの？」

「な…何よ！悪い!？」

「いや…そうじゃないけど…」

「セシリアはパスタ、シチュー、サラダ、スイーツ…」

「多いー!」

「えっ!?何でもいいと…」

「確かに言っただけど多い!多すぎる!」

全部数えると2000は越える量だった

-. -.

一夏達は調理を始めていた

「うん、いいんじゃない?」

一夏と箒と鈴は順調に調理を進めるが  
セシリアは…

「香りを引き立てるためにワインを…

ああ、これも入れて見ましようか…」

そう言いながらタバスコを入れるセシリア

「僕は、何も見ていない…僕は、何も見ていない…」

そう言いながらセシリアから遠ざかる来人

-. -.

「出来た!」

「私も出来たぞ」



「私も出来たわ」

「私も出来ましたわ!」

(セシリアの凄い不安…)

料理を並べる一同

見た目はちゃんとしているが

異様な雰囲気を出している物が一つある

(これがセシリアのか…)

「食い物〜!」

いきなり太った男性が入って来た

「「「「誰!?」」」」

太った男性は机にある料理を食べ始めた

「「「ああ!?!」」」

そしてセシリアの料理を食べると

「うえっ!?!?!」

太った男性は悶え始めた

「うえっ!?!?!うっ!?!?!うおおおお!?!?!」

太った男性はネコヤミーになる

『来人、ヤミーだ』

「見れば分かるよ！変身！」

【タカ！ゴリラ！バツタ！】

来人はオーズタカゴリバに変身する

オーズはゴリラアームでネコヤミーを殴り飛ばす

-  
-  
-

【タカ！カマキリ！バツタ！】

オーズはタカキリバに変わる

カマキリソードで斬りかかるが

ポヨンツ！！

「刃が通らない！？」

「ニヤア！」

「うわっ！！」

オーズは飛ばされる

「来人！」

シャルルはバーストライバーを構えるが

ネコヤミーは口から光弾を放ち  
バーストライバーを弾く

「キャツ！！」

「シャルル！…やるしかないか！」

【ライオン！トラ！チーター！ラタ ラタ  
ラトラ〜タ〜】

オーズはラトラーターコンボに変わる

「うおおおおおおお！！！」

オーズはライオディアスを放つ  
ネコヤミーのセルメダルが散らばり中の男性が見えてくる

「よし！このまま助ければ！」

オーズはチーターレグで加速し男性を助けようとするが  
男性に何かが刺さる

【バード！】

「あれはガイアメモリ！？」

「うわあああああ！！！」

男性にガイアメモリが刺さりネコヤミーごと姿が変わる

「何だ？あれ…」

『仮としてヤミードーパントと言っておこつ』

ヤミードーパントは風をおこしオーズを飛ばすと  
飛んでいく

「待て！」

【タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜】

オーズはタジャドルコンボに変わりヤミードーパントを追う

- - -

オーズはタジャスピナーの光弾でヤミードーパントを打つが  
全て避けられる

ヤミードーパントもオーズに光弾を打つ

オーズは避けるが次第に避けきれなくなり

遂には当たり打ち落とされる

「うわぁっ！！！」

地面に激突し変身が解ける

「来人！おい！大丈夫か！？」

誰かが来人に話しかける

「うつ…ん？…翔太郎？…」

「ああ、そっだ！大丈夫か！？」

中学時代の親友鳴海翔太郎に会う

「うん、大丈夫だよ…ありがとう翔太郎…」

するとヤミードーパントが降りてくる

「なんだありゃ…！」

「分かんない…そっだ翔太郎！僕の代わりにWに変身してくれ！」

「…よくわかんねえけどやってやりゃあ！」

翔太郎は来人からダブルドライバーを受け取り  
腰に付け

ジョーカーメモリを起動する

【ジョーカー！】

「フィリップ、頼んだよ」

来人はオーズドライバーを付ける

『分かった』

【サイクロン！】

「『変身…』」

【サイクロン！ジョーカー！】

【タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！】

翔太郎は仮面ライダーWに來人は仮面ライダーオースタトバコンボに変身する

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

-. -.

「せいっ！はあっ！」

「はあっ！おりゃっ！」

オーズとWはコンビネーションでヤミードーパントを攻撃するが全く効いていない

「ライダー二人で戦ってんのにびくともしねえぞ！」

ヤミードーパントは光弾と風おこしでオーズとWを吹き飛ばす

「ぐわあっ！」

ヤミードーパントはオーズとWに近づいていく

「もう駄目なのか？」

「待った！待った！待った！」

何かがヤミードーパントに突撃する

ヤミードーパントは吹き飛ばされ

ヤミードーパントがいた場所に誰かが倒れていた

「イテテツ…やっぱまだ馴れねえや…」

「君は？」

「仮面ライダーフォーゼ！三日月ゲンタロウ！

全てのライダーと友達になる男だ！」

「フォーゼ？友達？」

「とりあえずこいつ倒せば良いんだろ？」

タイムンはらせてもらっぜー！」

そうやってフォーゼはヤミードーパントを殴り飛ばす

そしてフォーゼはベルトの一番右のスイッチを押す

【ロケットオン】

フォーゼの右腕がロケットモジュールに変わる

「おりゃあ…！」

ロケットモジュールでヤミードーパントを殴る

「オラッ！オラァッ！」

「凄い…押してる…」

「そろそろ決めるか！」

「待つて！その中には人がいてそれにガイアメモリを  
砕かないで倒したら中の人が死んじゃう！」

「え？何だつて！？じゃあ、そのナントカメモリを砕くには？」

「メモリブレイクなら俺が出来るぜ」

「そうか、じゃああんた達も決めようぜ！」

「うん、それなら良いかも」

オーズとWは了承する

「じゃあ、行こう！」

「「おう！」」

オーズはオーズドライバーをスキャンする

【スキヤニングチャージ！】

Wはジョーカーメモリをマキシマムスロットに入れはじく

【ジョーカー！マキシマムドライブ】

フォーゼはロケットモジュールで空に飛び



ベルトの黄色いスイッチを押す

【ドリルオン】

オーズもWも空に飛ぶ

フォーゼはベルトのレバーを押す

【ロケット ドリル リミットブレイク】

「セイヤアアアアア！！」

「ロケットドリルキック……ク……！」

「ジョーカーエクストリーム……！」

オーズのタトバキック、Wのジョーカーエクストリーム  
フォーゼのロケットドリルキックが決まり  
ヤミードーパントは爆発する

辺りにセルメダルが散らばりガイアメモリが砕けて  
男性が倒れていた

するとフォーゼの左端のスイッチが光る  
フォーゼはそのスイッチを押す

【レーダーオン】

『三日月、何をしている』

「おう！ケンゴ！今な……」

『余計な話はいい、早く戻れ』

「おい！ケンゴ！お前な！」

『口答えするな、時間の無駄だ』

「ちえっ、分かったよ…」

フォーゼはオーズとWを見る

「そう言う事だから、じゃあな！」

【ロケットオン】

フォーゼは飛び去る

「仮面ライダー…フォーゼ…」

「おかしな奴だったな」

番外編 料理と合成と宇宙キタ……!!

(後書き)

ゲンタロウ「三日月ゲンタロウ！全てのライダーと友達になる男だ！」

来人「誰!？」

フィリップ『どうやら検討中のフォーゼの主人公らしい』

いやあ〜主人公だけ決まったからね

来人「出した理由は？」

第1話のフォーゼがかっこよくて！

来人「そんな事だろうと思ったわ！」 幕のあの蹴り

ごほおっ!!

来人「そう言えば新キャラ出たけど」

翔太郎君の事ですね？

彼の事は後で紹介に加えますが

来人「何でWになれたんだ？」

実は、フィリップが承諾すれば誰にだって使えると言つ裏設定があるのですよ！

来人「本当は？」

影薄くなったWを出させる為の設定です…

オーズ「やっぱりかぁ…!!」　ゴリバゴーンパンチ！

ぐはぁっ!!

ゲンタロウ「とりあえず、する事になったらよろしくな！」

フィリップ『感想なども待ってるよ』

第15話(前書き)

ラウラ編スタート!

## 第15話

数年前ドイツにて

「お願いします！私にその戦術を教えてください！」

銀髪の少女が克己に頭を下げる

「するかどうかは来人次第だ、此方も雇われてる身だからな」

克己は来人の方を見る

銀髪の少女も来人を見る

「良いんじゃないかな、彼女は強くなりたかって思って言ったんでしょ？」

銀髪の少女は大きく首を縦に振る

「分かった、だが俺の指導は厳しいぞ？」

「はいっ！」

...

「来人、おはよ」

「おはよう、一夏」

来人はいつも通り教室に来ていた

「国崎来人！」

ラウラが来人を呼ぶ

「何？ラウラ」

「少し付き合え」

「？分かった…」

来人は席を立つ

「来人…」

「大丈夫、行ってくるね」

来人はラウラに付いていく

-  
-  
-

「国崎来人、お前は本当に大道教官を知っているのか？」

「うん、そうだよ。克己は僕のボディガードだったからね」

「では、私が大道教官に頼んだ時も…」

「居たよ、僕はちゃんとラウラを覚えているからね」

「そう…か…」

( なら何故彼を思い出す事が出来ない？ )

「話はそれだけ？」

「ああ、呼び出して悪かったな」

「気にしないで、じゃあ教室でね」

「ああ」

来人は教室に戻る

「何か楽しげに話していたなあ？ラウラ」

「！？」

ラウラは声のした方を向く

「！あなたは！」

その者はうつすらと笑う

- - -

来人が教室に戻る途中

「来人！」

「どうしたの？一夏」





バーンッ!!!

保健室のドアが吹き飛んだ

そして大勢の女子が入って来る

「国崎君！デユノア君！私と組んで！」

大勢の女子が一斉に腕を伸ばす

正直かなりホラーに見える

「まず、説明を求めろ！」

「はい！これ！」

一人の女子が来人に紙を渡す

「何々？タツグトーナメント？」

二人一組のペアを作ったのISTトーナメント…ふん…」

来人は紙を女子に返す

「つまりこのトーナメントに出たいと」

「……はい！」「……」

「それで僕やシャルルと組みたいと」

「……はい！」「……」

「それであわよくば恋仲になって充実した学園生活を送りたいと」

「…………はい!」「…………」

「なるほどねえ」

「……………お願いします!」「…………」

「だが断る」

「……………え〜!?!」「…………」

だってそんなの嫌だし

来人は心の中で愚痴った

「そんなんだつたら同じ男のシャルルと組むよ」

「え?」

来人が話し合わせるみたいな視線でシャルルを見る

「そ…: そうだね! ごめんね? 僕も来人と組むよ」

「納得出来ませんわ!」

「そうよ! 来人! 私と組みなさい!」

「そんな事言う前に体直せ」

来人が二人の包帯している部分にチョップする

「「っ！！！！！」」

- - -

食堂にて

あの後幕に呼び出され食堂に来ていた

「箒、待った？」

「いや、私も今来た所だ」

「それで話って何？」

「ああ、タッグトーナメントの事なんだが  
私と組まないか」「ごめん、シャルルとすでに組んでるんだ」「そうか  
…」

箒は少し気を落とす

「それで？話はそれだけ？」

「あつ、もうひとつあるんだ」

「何？」

「その…な…トーナメントでもし優勝したら…私と…」

箒はもじもじし始める

「第と？」

「私と…付き合ってくれないか？」

「…いいよ別に」

「そ…そうか！いいのか？話はそれだけだ！教室に帰るぞ！」

「？うん」

それを影で聞いていた者がいた

「これは、耳寄りな情報だ！優勝すると国崎君と付き合える！」

…

翌日

「ねえ、聞いた？今度のトーナメント優勝したら国崎君と付き合えるんだって！」

クラスはその話題で持ちきりだった

「いつから僕が優勝商品になった…」

「そうだね、来人どうするの？」

「面倒くさいから言ってみるか」

次の一言でクラスは凍りついた

「皆僕に勝てるの？」

「……………！」

「そうだったあー！！」

「国崎君も出るんだった！だったら勝率かなり下がるじゃん！」

わーわーきゃーきゃー

「来人って意外と黒いんだね……」

- - -

なんだかんだで当日

「なんだかんだって……適当過ぎるな……」

『来人、メタは止めよう』

「それより！来人、勝つ気満々だったね」

「負ける気しないし勝たなきゃ男が廃るって奴かな」

「それじゃ、負けたら女子の制服で来てもらおうかな」

「げっ！！それはさらに負けられないなあ！」

(似合うと思っけどなあ……)

そんな会話をしていると対戦表が発表される

「え!？」

「…」

一回戦

国崎来人      シャルル・デュノア

VS

ラウラ・ボーデヴィツヒ      篠ノ之箒

「いきなりラウラが相手か…」

## 第15話（後書き）

次週から対戦スタート!!

来人「作者、なんだかんだは無いだろ」

その間に何かあったか分かんなかったから

来人「特訓とかあるだろ！」

特訓の必要は何処にあるんだい？  
暫くは負ける事は無い主人公君

来人「うっ…否定は出来ない…」

フィリップ『だがラウラ・ボーデヴィツヒに  
負ける可能性もあるんじゃないか？』

原作でも負けなかったし

正直言つて少し次のネタバレになるけど  
ラウラは嘸ませだし

来人「そうなの!？」

フィリップ『作者の考える事はよく分からないな…』

では、感想などお待ちしてます！



第16話(前書き)

戦闘描写苦手だな…  
自分って何が得意だろう…

## 第16話

「来人、準備出来た？」

「うん、今行くよ」

シャルルに呼ばれ立ち上がる来人

『来人、ラウラ・ボーデヴィツヒのISに注意した方が良い』

「うん、AICだよね…」

来人とシャルルはピットにつく

「じゃあ、行こっかシャルル！」

「うん！」

来人とシャルルはISを展開し  
アリーナに出る

- - -

アリーナに出るとすでに  
ラウラと箒がいた

「国崎来人…お前を倒す！」

「ラウラ？何か様子が変だな…」

来人はそう言いながらプリズムビッカーを構える

「お手並み拝見といこうか…国崎来人…」

男性は笑うと目が紫に光った

-  
-  
-

ラウラはプラズマ手刀で来人に突っ込む  
来人はプリズムソードで受け止める

「ラウラ!どうしたんだよ!」

「うるさい!」

ラウラの目が一瞬紫に光ったが  
来人は気づかない

箒はチャンスかと思い来人に斬りかかるが

バババババツ!!

「!?!」

箒はギリギリ避ける

「僕がいること忘れないでよね！」

「くっ…」

来人とラウラはつばせり合いが続くが  
徐々に来人が押されていく

「どうした？その程度か？」

「くそっ…」

『来人、あれを使おう』

「しょうがないか…よし！」

【エクストリームモード起動します】

来人は高速でラウラから距離を取り  
プリズムソードのスイッチを押す

【プリズム！マキシマムドライブ】

「『プリズムブレイク！』」

来人はプリズムブレイクでラウラに斬りかかる

「無駄だ！」

ラウラはAICを発動する

その瞬間来人が消える

「ぐあつ!?!」

「!?!」

来人はラウラから離れ箒を斬っていた  
箒はシールドエネルギーが0になる

「ごめんね、箒

シャルルに少し手伝ってもらいたくて」

【エクストリームモード終了します】

「いや、来人に気がつかなかった私に敗因がある」

「うん、分かったじゃあシャルル  
今から言う事をやるからね?」

「うん!」

-  
-  
-

来人とシャルルがラウラの方を向くと  
来人は四本のガイアメモリをプリズムビッカーに入れ  
プリズムソードを抜きラウラに突っ込む

【サイクロン!ヒート!メタル!ジョーカー!】

マキシマムドライブ】

「『ビツカーチャージブレイク!』」

「無駄だと分からないのか!」

ラウラはA I Cを発動する

今度は来人は止まる

「停止結界の前では無意味だ!」

「単体ならね」

シャルルがラウラを撃つ

「!?!」

ラウラは攻撃を当てられA I Cを解いてしまう

「今だ!」

来人はビツカーチャージブレイクをラウラに当てる

「ぐあっ!?!」

ラウラはフィールドの壁まで飛ばされる

「シャルル!」

「OK!」

シャルルのISラファール・リヴァイブ・カスタム？が  
灰色の鱗殻（グレー・スケール）を出し  
壁まで飛ばされたラウラに打ち付けていく

ラウラのシールドエネルギーが徐々に削られていく

『これで勝ったね』

（そんな…私は負けるのか？）

・力を欲するか？汝に変革をもたらす力を欲するか？

（力…？ああ、欲しい

絶対無二な力を私に寄越せ！！）

「うわあああああ！！！！」

ラウラのISが形を変えていく  
そしてラウラを飲み込み  
形状を保つたら  
女騎士の様な姿になっていた

「まさか…あれって…」

『間違いない、VTシステムだ』

「あれは使用禁止の筈だぞ！」

『極秘にやっていたのだろう』

それに、奴の手に持っている物を見ているんだ』

「雪片!?!」

『VTシステムはモンテグロツソ優勝者の  
戦闘データをISに組み込む技術だ』

「それって、つまり…」

『ああ、あのISはモンテグロツソ初代優勝者  
織斑千冬のデータを組み込んでいる』

すると相手が一瞬で来人に近づく

「え…?」

相手の裏拳をくらい壁に叩きつけられる来人

「ぐはあっ!!」

そしてさらに近づき偽雪片で来人を何度も斬る

「ぐあああああああ!」

「来人!」

来人は崩れ落ち倒れる

-  
-  
-



相手はシャルルの方を向きシャルルに近づいていくと  
来人が立ち上がる

【ISダメージ操縦者の精神共に危険値に達した為  
危険物排除に伴いアクセルモードを起動します】

来人のISダブルの左半身が赤くなり

右手にアクセルモード専用の武器エンジンブレードが現れる

ダブルのもうひとつの単一仕様能力

アクセルモードが発動する

## 第16話（後書き）

ラウラ戦もかなりうる覚えで書きました

と言うわけで七本目のガイアメモリは

アクセルメモリでした

ちなみにアクセルモードは

まんまサイクロンアクセルエクストリームです

来人「前書きとテンション違うじゃねえか！」

だってどちらかと言うと後書きの方が楽しいし

フィリップ『前に言っていた嘸ませと言うのは……』

うん、これの事

では、ここら辺で

感想などお待ちしてます

## 第17話(前書き)

かなり時間がかかってしまったOTL

## 第17話

【アクセルモード起動します】

来人のISダブルがアクセルモードになる

【対象者VTシステム戦闘を開始します】

来人はプリズムビツカーを戻しエンジンブレードを構える

VTシステムもそれに反応し偽雪片を構える

「来人…」

シャルルは心配そうな表情で来人を見る

そしてその場から来人が消える

皆が気が付けば来人はVTシステムを切っていた

「速い!!!」

VTシステムも偽雪片で来人に切りかかるが  
全て避けられる

そしてまたVTシステムを切りつける

来人はVTシステムから距離をおき  
一気に加速する

そしてVTシステムが見えない速さで  
切り刻まれていく

バババババツ！  
シャルルが来人を撃った

「もう止めてよ…来人！！」

来人はシャルルの方を向き

【ISがこちらへ攻撃  
戦闘意思とみなし殲滅対象に追加】

（来る！！）

来人がシャルルに向かい加速する  
シャルルはショットガンを構えるが  
直ぐに銃口を切られる

来人の斬撃がシャルルに襲いかかる

【エンジン！マキシマムドライブ】

来人はシャルルをAの字に切り  
リヴァイヴのシールドエネルギーが0になる

【シールドエネルギー0を確認  
殲滅対象をVTシステムに変更】

来人はVTシステムを見る

VTシステムは偽雪片を構え来人に突進する  
来人もエンジンブレードを構えVTシステムに向かう  
偽雪片とエンジンブレードがぶつかると

眩しい光がアリーナを包む

- - -

「…ここは？」

来人は白い空間に沢山の本棚がある場所にいた

「いったい何処なんだ？」

奥からラウラが現れる

「ラウラ！」

「国崎来人！」

「国崎来人、ここが何処か分かるか？」

「いや、僕にもわからないよ」

「そうか」

ラウラは少し落ち込む

「ラウラは何をしていたの？」

「何処かに出口が無いか探していたんだが  
どこもこの本棚だらけだ」

すると来人の前に緑のローマ字で【国崎来人】

【ラウラ・ボーデヴィツヒ】と浮かび上がる

「何？これ…」

すると沢山の本棚が移動する

「まさか…じゃあ 【ドイツ】 【鍛練】 【志願】 【大道克己】  
！」

来人の言った事が緑のローマ字で浮き出て  
本棚が動く

「何をしているんだ？」

「僕達とラウラの最初の出会いをいわゆる検索をしたんだ」

来人は一冊の本を手に取り開く

「これは…！！」

「ラウラ？どうしたの？」

「全て…思い出した…」

克己の鍛練に志願した所に来人がいた事  
と言うより来人が関連すること全てを思い出す

「今まで、忘れていたのは…マキ大佐の仕業か…」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。来人…私がお前にとって強くなる事は何かを聞いた事を覚えているか？」

「うん、覚えているよ」

「それでお前は…」

「この手で守れる物が一つでも多くなる事だよ」

「ああ、それにお前は私に言ってくれたよ」

来人は頷く

「うん、突然手にいれた強さなんて強さとは言わない  
本当の強さは積み重ねていくものだ  
ってこれは克己に言われた言葉なんだけど…」

あははつと笑う来人を見て

「その後なんだが…」

「ああ、もしラウラが強さを求めすぎて  
つまづいても僕が手を伸ばしてあげるって言う奴？」

「ああ…」

来人は何かを感じとったのか微笑み

「大丈夫、僕が手を伸ばすから…」



- - -

光が収まり

「来人？」

【アクセルモード終了します】

「ごめんね？シャルル  
心配かけて」

「来人！！」

「だけど話は後でね、今は！！」

『やるんだね、来人』

「ああ！ラウラの手を掴む！」

## 第17話（後書き）

なんだか無理矢理感がありますが  
VSラウラ次回で完結の予定です！

感想などお待ちしてます…

第18話(前書き)

多分かなりグダグダ…

## 第18話

「ラウラの手を掴む！」

いまだに暴走しているVTシステムに来人が言う

「でも、大丈夫？アクセルモード使う前ではかなり  
圧倒されてたけど…」

『確かに反応速度などはVTシステムより劣っているかもしれない  
…だが』

「相手の動きの流れは体が覚えてる！！」

来人がそう言った後にVTシステムが来人に切りかかるが来人はそ  
れを最低限の動きでかわす

VTシステムは切りかかりや連続で突きをしたりするが  
全て避ける

「凄い！全ての動きに反応してる！」

来人はプリズムビッカーを出しプリズムソードを  
引き抜きVTシステムの攻撃を盾で止め  
プリズムソードで切る

VTシステムは偽雪片を構える

『どつやらの一撃で終わらせるみたいだね』

「ならこつちもそうしますか!!」

来人はプリズムソードを盾に収め

【サイクロン！ヒート！ルナ！ジョーカー！  
マキシマムドライブ】

四本のガイアメモリを盾のマキシマムスロットに入れ  
プリズムソードを引き抜き盾を投げ  
来人もプリズムソードを構える

.....

互いに構えたままで長い沈黙が続く

V Tシステムが先に切りかかり来人も動き出す  
来人より先にV Tシステムは切りかかるが

「もう、くらわないよ」

来人は偽雪片を掴み

「『ビツカーチャージブレイク!!』」

V Tシステムを一刀両断し切り口からラウラが出てくる  
来人はラウラを抱える

すると来人はなにかが目に映る

- - -

来人が見えたのはラウラの今までの生い立ちだった

ラウラは生まれてからずっと軍人として育てられ

軍人としてはエリートの方に部類されていたが

やはり女の子なのか徐々に他人に遅れをとっていく

それに悩んでいた時来人と克己に出会う

克己に志願し来人と共に鍛えられ再び軍人のトップに

返り咲くそしてこの時に本人は気づいていないが

来人に少し恋心を持っていた (来人はこれを見ても

ラウラが恋心を持っているのはわかっていないが…)

来人達が帰った後ラウラはキヨト・マキと言う人に

呼ばれる

「何でしょうか？マキ大佐」

「ボーデヴィツヒ君、軍人にそんな感情は入りません」

「!?!」

マキの目が紫に光りそしてラウラの目も紫に光り

ラウラは倒れる

そこから一気に回想が飛ばされ

再開したのがISが実戦で使われる事になり

それでラウラにIS適正の手術が行われ

ラウラの片目が変色した

だが上手くいかなかった為ラウラはお払い箱にされ  
その後に千冬と出会い今に至る

「ラウラ…」

「分かっただろう？自分の居場所が欲しかったから  
私は強くなりたかったんだ…」

「居場所ならあるじゃないか…僕達が…」

「!?!?…来人」

「言ったでしょ？助けが欲しかったら手を伸ばしたらいい  
ラウラがピンチになった時は僕が守ってあげるから…」

「…」

（この言葉の安心感に私は惚れたのかもしれないな…）  
- - -

来人は地面にラウラを寝かせると

ISの展開を解く

「来人…大丈夫かい？」

「ちょっと無茶したかも…ごめん…気絶する…」

来人は倒れる

「お疲れ様、来人」

- - -  
「素晴らしい…オーズの器と聞いて  
期待はしていたがその期待以上とは…」

その男の外見はラウラの回想に出てきたキヨト・マキに酷似していた

「この体の意志も無くなったがああのも体も欲しい…  
死なれたら困るから保険をかけておくか…」

男は腕を異形の形に変え三枚の紫のメダルを  
来人に投げる

紫メダルは意志を持っている様に来人へ向かっていく

- - -  
「何？あれ…」

三枚の紫メダルが来人の上で旋回している

そして三枚の紫メダルが来人に入ろうとした時

「ハアッ！！」

アリーナのシールドを突き破りWに似た白い戦士が  
現れる

戦士はコンバットナイフに似た武器を構え  
紫メダルを次々と弾く

紫メダルは諦めたのか戻っていく



-. -. -

「!? 奴は!」

「ギル様…」

男の後ろからさらに男がやって来る

「レイ! どう言うことだ! 奴の足止めを任せた筈だぞ!」

「申し訳ありません、上手く巻かれてしまいました…」

「もういい! 戻るぞ!」

ギルは投げた三枚のメダルを取るとレイとその場を去る

-. -. -

白い戦士はメダルが去ったのを見ると来人に手を伸ばす

「ら… 来人に何をする気!」

シャルルはバースバスターを取りだし

白い戦士に向ける

白い戦士はお構いなしに来人の頭に手を置き撫でる

数回撫でるとその場を立ち去る

来人は嬉しそうな表情をしていた

## 第18話（後書き）

ラウラの過去話全然おぼえてねえ…OTL

感想などお待ちしてます！

来人「もっと何か話さんかあ！」

だって出来たの夜遅いし！

## 第19話

アリーナから出た白い戦士はIS学園を出て何かを待っていた

「……」

白い戦士の姿が変わり男性になる

「あんたは、本当に無茶ばかりね……」

男性とほとんど同じ格好をした女性が来る

「レイカか、奴らは？」

「逃げられたわ、奴らまたあの子を襲うつもりでしょうね」

「そうか……」

すると二人の元に軍事用ヘリが降りてくる

「なら、早速出発するか」

「ええ、でも今度はあまり無茶しないでね克己」

「ああ……」

レイカは先にヘリに入る

克己はIS学園の方角を見る

「また会おうぜ…来人…」

克己もへりに入りへりは飛んでいく

- - - -

保健室にて

「うっ…んっ…」

来人は目を覚ます

『来人！起きたんだね』

「うん…そう言えば、フィリップ」

『なんだい？』

「僕は何時まで寝ていたの？」

『約三日位だよ』

「そっか…」

すると保健室のドアが開きシャルルが入ってくる

「来人！起きたんだ…よかつたあゝ…」

「心配してくれてありがとシャルル

そっだ！トーナメントはどうなったの！？」

「VTシステムの事があって、中止になったよ  
でもデータを取るために一回戦は全部やるみたい」

「そっか…」

すると何か音が聞こえた

「………」

「」飯食べに行こっか」

「…はい」

どうやら来人のお腹の音らしい

- - -

食堂にて

食堂にいる女子が来人を見てため息をつく

「何だよ、僕の顔に何か付いてる？」

「あはは…」

シャルルは苦笑いをする

「来人！目覚めたか：体は大丈夫なのか？」

「心配してくれてありがとうと篤  
体も、もう大丈夫だよ」

「そうか、良かった…それと…な？来人」

「ん？何？」

「その…覚えてるか？」

「え？何を？」

箒の顔が赤くなっていく

「いやっ…その…優勝したら…私と…付き合つと…言つ事なんだが…」

「ああ、良いよ付き合つても」

一瞬食堂が静まり返る

「ほ…本当か！？」

「うん、良いよ買い物くらい」

食堂にいる人達が凍りつく

「え？何？なんかまずい事言つた？」

すると箒の体が震える

「箒？どうしたの…」  
「ほおっ…！」

来人の腹部に箒のパンチが入る

「そんな事だろうと思っただわ!!!ふんっ!!!」

「がはあっ!!!」

膝を付き腹部を押さえる来人の腹部を蹴り上げ箒は食堂を立ち去る

「来人ってたまにわざとやってるんじゃないかって思う所があるよね」

腹部を押さえながら倒れている来人にシャルルは言った

-. -. -

アリーナの更衣室にて

授業が終わり着替えようとしている時

「国崎君！デュノア君！いい知らせですよ！」

そう言っつて山田先生が更衣室に入ってくる

「なんですか？山田先生」

「今日男子の大浴場の使用が許可されました！」

「本当ですか!？」

普段大浴場は女子が使っている為男子は必然的に部屋のシャワーを使っていた

「久しぶりの風呂か〜 シャルル！僕、先に入ってくるね！」

「うん！」

来人が大浴場へ行くと更衣室の前に千冬が立っていた  
混浴なんて考えてる奴を捕まえる為らしい

- - -

大浴場

「はあ〜やっぱり風呂は良いなあ〜」

来人は湯船に浸かっていた

「来人、湯加減はどう？」

「ああ、凄く良いよ〜」

「そう、じゃ〜」

大浴場の扉が開きシャルルが入ってくる

「えっ!？」

来人は瞬時に後ろを向く

チャプンツと音が聞こえたのでシャルルは湯船に入ってきたと確認  
する来人



そしてシャルルは来人の背中にもたれ掛かる

「来人…あのね？僕…ここに残る事にしたんだ…」

「そ…そうか…」

「うん、でね？何でわかる？」

するとシャルルは来人に抱きつく

「来人がここに居て良いつて、言ってくれたからなんだよ？」

「そっ…そっ…」

「だからね、僕残る事にしたんだ  
皆と居たいしそれに来人がいるから…」

「シャルル…」

「シャルロット…」

「え？」

シャルルの言った事に疑問を持つ来人

「僕の本当の名前…二人きりの時だけでも良いからシャルロットって呼んで？」

「分かったよ、シャルロット…」

シャルロットは少し笑顔になる

「うん、それにね僕…来人の事が…」

「……」

「来人？どうしたの？」

フラツ、バシャーンツ！！

「ちよつと来人！？大丈夫！？」

来人は限界だったのか気絶し湯船に倒れる

「……」

「んっ……」

来人は目を覚ます

「あっ…気がついた？」

「うん…あれ？なんで服着てるんだ？」

さっきまで風呂に入ってた筈だけど…」

今の来人は服を着ていた

「そ…そんな事より！食堂行こうよ！僕お腹へっちゃったなあ」

「そっ？じゃあ行こっか」

- - -

来人達が大浴場を出ると案の定女子生徒が正座させられていた  
その中には鈴とセシリアもいた

食堂で夕食を食べ

部屋に戻り適当に喋って寝た

- - -

次の日

教室にて

「え〜…今日は転校生と言うか…皆さんはすでに知っていると思いますが…」

山田先生がぎこちない笑顔で言う

そして教室に入ってきたのは

「シャルロット・デュノアです

皆さん改めて宜しくお願ひします」

シャルロットだった

「デュノア君は、デュノアさんでした…」

この事でクラスは騒然となる

「デュノア君は…女!？」

「そうよねえ…」

「待つて！昨日男子が大浴場使つてたよね！？」

すると教室の後ろの壁が爆発する

「来人く！！！」

「鈴！？」

『来人！衝撃砲が来るぞ！』

「えっ！？待つて鈴！死ぬから！打つたら僕死ぬから！」

「死ねえええ！！！」

鈴が入ってきて来人に衝撃砲を打つ

「うわぁ・・・！！！」

衝撃砲は来人に当たったかに思えたが  
ラウラが完全には修理が終わってないレーゲンのAICで来人を守  
っていた

「ラウラ！ありが…むぐっ！！！」

クラスにいる生徒全員に衝撃が走った

ラウラが来人にキスしたのだ

「お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「えっ…嫁？」

「らっいとっ…」

「何…!!」

来人が見ると一夏達からとんでもない殺気が出ていた

「逃げなきゃ…! あっ、ごめ…ん…」

来人は誰かにぶつかったそれは

「来人って本当に大胆だよな」

人目も気にせずにキスしちゃうんだもん  
僕、少し驚いちゃったなあ」

笑顔だが目は笑っていないシャルロットだった

「へ…変身…!」

【タカ!トラ!チーター!】

来人はオーズカトラーターになり  
全速力で逃げる

「………待て………!!」

「許してー…!!」

来人は三時間目の終わりまで追いかけられた

## 第19話（後書き）

「ぜえっ…ぜえっ…ぜえっ…ぜえっ…」

来人君お疲れ様です！

『しかし今回は災難ばかりだったね』

箒に殴られシャルロットに息子を見られ

ヒロイン達との恐怖の鬼ごっこ

不幸三昧ですね

「待て！シャルロットに息子…？どづいっこと…」

思い出さなくていい！記憶消去術！広○苑版マ○チヨ…ップ！！

「ぐはあっ…！！」

『本で…殴った？』

シャルロットに息子の解釈は読者の皆様にお任せします！

感想などお待ちしています！

「あれ？僕何してたっけ？」

『おしとんぼ』

## 第20話(前書き)

今回は新オリキャラが出ます！



## 第20話

放課後

「僕、荷物まとめなきゃいけないから  
部屋に戻ってるね」

「うん、分かった」

シャルロットは女だと言う事をばらした為  
部屋移動と言う事になった  
部屋割りの作業で山田先生が泣いたらしい

すると来人の携帯が鳴る

「もしもし?」

「やつほく来くん 皆のアイドル東さんだよ」

「後日改めて連絡します」

「ちよっ…」

ブチッ!

来人は電話を切る

「…はい」

『酷いよ、来くん！束さんのラブコールを勝手に…』

「後日改めて…」

『わあああ！！分かったから！もつふざけないから！！』

「で、何の様ですか？」

来人は少し不機嫌に言う

『実はね…あの子が逃げちゃって…』

「あの子ってまさか…」

『うん、来くんの考えてる通りだよ  
おかしいなあ、嚴重に縛ってた筈なんだけど…』

「束さん」

『ん？何？』

「一ヶ月は電話して来ないで下さい！」

ブチッ！

来人は焦り始める

「どうしよう、迎え撃つても無駄だし…  
やっぱ逃げるか！」

来人はその場から逃げる

-  
-  
-

とある場所で少女が立っていた

「向こうから来人さんの匂いがする」

来人さ〜〜ん」

少女が人間とは思えない速度でその場を立ち去る

-  
-  
-

来人はとりあえず走っていた

「来人！」

来人は呼び止められる

「筈、何の様？」

「今から一夏の剣の修行をするんだがお前もやらないか？」

「あつ…いやあ…今はちょっと用事が…それじゃ！」

すると来人は誰かに腕を捕まれる

「酷いよ！僕を見捨てないでよ来人！」

「放せ、一夏！僕には急ぎの用事が…」

「来人さ〜ん」

「セシリア！？」

セシリアが来人の元へ来る

「料理を作ったのですが試食してくれませんか？」

セシリアは手に持った料理とは思えないおぞましい何かを来人に差し出す

「いや、今度にしてくれない？僕には用事が…」

「来人！」

「今度は鈴かよ！」

鈴が来人の元へ来る

「ISの特訓に付き合ってくれない？」

「また今度じゃ駄目かな？」

「何だよ、特訓に付き合えない訳でもあるの？」

「それは…」

「嫁よこんな所に居たのか、探したぞ」

「何でラウラまで！？それに嫁じゃないし！」

ラウラが来人の元へ来る

「夫婦はいつも一緒に居るのが当然だろう？」

ラウラの言った一言で来人以外の全員が止まる

「ちょっと待って、いつから来人とラウラちゃんが夫婦になったの？」

「今日からだ、何か文句があるのか？」

「当たり前だ！結婚もしていないのに夫婦を名乗るなど！」

来人は箒達が言い争っている間に逃げようとするが

「来人さっくん」

何かが来人の腹部に突撃する

「あべしっ!!」

「「「「「!?!?!?!」」」」」

来人はそのまま吹っ飛ぶ

「来人さくん 会いたかったです」

来人に突撃したのは白髪の見た目は来人達と同じ年齢に見える少女  
だった

「いてて…お前…」

「ねえ…来人…その子誰？」

「説明して貰おうか…」

「来人さん…返答によつては…」

「あんたは…またそんな…乳の大きな…」

「来人…貴様私の嫁と言う自覚が足りぬ様だな？」

箒達の怒りの矛先が来人に向かう  
鈴は何か変な方向へ行っているが

「分かりました…説明します…」

「  
」

なにもかも諦めた来人だった

## 第20話（後書き）

フィリップ『新キャラの話、次回へ丸投げしたね？』

これが今の限界なんです…

フィリップ『でも良かったのかい？まだ名前も決まって無いんだろ  
う？』

ギクツ！それは言わないで…

フィリップ『だがシャルロット・デュノアはどうしたんだい？』

それは今度番外編で書こうかと思っています

感想などお待ちします！



## 第21話(前書き)

今回はたぶん短いそして駄文だと思います…

## 第21話

とりあえず来人の部屋で話となった

入った時にシャルロットが焦っていたが

来人に引っ付く謎の少女を見たら何か背後から黒い物を出していた

「……で、その子は誰（なんだ）（ですの）？」

「」

「えっと…その…なんと云うか…」

来人は言葉を切れ切れに言う

「ガイアメモリです…」

「……え…え…!!」

「はい！私はガイアメモリのファングと申します！」

フアングと名乗った少女に来人以外の全員が驚いた

「ガ…ガイアメモリって人間だよ？」

「いやっ…突然変異って奴で人間になってるんだよ」

「ちゃんとメモリにも慣れますよ！」

するとフアングはメモリになる  
そしてすぐに戻る

「で、何で抜け出して来たの？」

「来人さんに会いたかったからに決まってる  
じゃないですか」

フアングの理由にため息を付く来人

「とりあえず、帰りなさい」

「嫌です、ここにいます」

「駄目、帰るんだ！」

「嫌です！」

「帰るんだ！」

「嫌です！」

「帰れ！」

「嫌です！」

「かーえーれー!!」

「いーやーでーすー!!」

するとファンクが何かを嗅ぐ

「来人さん！ドーパントです！」

「えっ？」

すると来人の元にクワガタが飛んで来る

「なにそれ？」

「スタッグフォン、説明は後ですよ」

来人はスタッグフォンの電話に出る

「どうしたの？翔太郎？」

『ああ、来人か？今、町でドーパントが暴れてんだ！』

「何だって！？分かった、今から行く！」

「どうしたの？来人」

「ドーパントが暴れてるんだちょっと行ってくる!」

来人は急いで部屋から出る

「あつ!待ってください!」

フアングも来人を追う

-  
-  
-

町ではバイオレンスドーパントが暴れていた

「リア充は皆死んでしまえ!」

たぶんモテない男が使っているのだろう  
そんなバイオレンスドーパントを来人が  
ハードボイルダーで飛ばす

「ぐおっ!」

「来人!やっと来たか」

「うん」

「来人さ〜ん」

「うわっ!!」

フアングは来人に抱き付く

それをバイオレンスドーパントが見ていた

「てめえも彼女持ちか…リア充は死ね!」

「…何であんな人ばかりがガイアメモリを?」

「気にしたら負けと思っとけ」

来人はフアングを自分から引き剥がし

ダブルドライバーを取り出す

「久しぶりに二人でやる?」

「そうだな!」

翔太郎は来人からダブルドライバーを受け取り  
腰に付ける

「フィリップ!」

『ああ』

待機中のダブルが少し光ると来人の腰に  
ダブルドライバーが現れる

そして翔太郎にジョーカーメモ리를渡し  
来人はサイクロンメモ리를出す

【サイクロン!】

【ジョーカー!】

「変し「待つてください!」ん?」

「私を使つて下さい!」

引き剥がしたファングが来人に言う

「どうする?翔太郎」

「まあ、いいか」

ファングは笑顔になるとファングメモ리의姿になる  
来人はサイクロンメモ리를しまい  
ファングメモ리를起動する

【ファング!】

「やろうか」

「ああ、今度こそ」

「変身!」

翔太郎はジョーカーメモ리를ダブルドライバーに差しジョーカーメ

モリは来人の方へ移動する  
来人は移動したジョーカーメモリを差し込み  
ファンクメモリを差しこむ

【ファンク！ジョーカー！】

「うおおおおっ！！！」

来人はWファンクジョーカーに変身する

「 来人

」 翔太郎

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

「罪があるのはリア充の方だ！」

バイオレンスドーパントはWに突撃するが

【アームファンク】

Wはアームファンクを出しバイオレンスドーパントを切りつける

「ふんっ！」

「ぐわあああ！！！」

『甘いな…』



「無理してカツコつけなくてもいいよ？  
似合っていないし」

『う…うるせえ！！』

「く…くそがあー！」

するとバイオレンスドーパントは球体になり  
Wに襲いかかる

「危なっ！！！」

Wは俗に言うイナ○ウアーで避けた

『嘘…！！！！』

だがバイオレンスドーパントは跳ね返って  
向かって来る

「今度こそ死ねえ…！！！！」

「仕方がないな、決めるよ翔太郎」

『あ…ああ、分かった』

Wはバイオレンスドーパントの攻撃を再び避け

【ファング！マキシマムドライブ】

「『ファングストライザー！！！！』」

「ギヤアアアア…」

ファングストライザーでバイオレンスドーパントを打ち返しバイオレンスドーパントは何処かに飛んで行った

するとニンジンのロケット ( ? ) がやってくる  
中から篠ノ之束が出てくる

「らいく〜ん 久しぶり」

「さっき話したばかりじゃないですか」

「そうだったね〜じゃあ」

束はWのファングメモリにスタンガンの様な物を当てる  
するとWの変身は解ける

「これで暫くは人間化は出来ないね」

来人はファングメモリを渡す  
束は受け取ると

「じゃあね、らいく〜ん」

「今度は逃がさないで下さいよ」

ニンジンのロケット ( ? ) は飛んでいく

「なあ、フアングメモリに何したんだ？」

「フアング専用のガイアメモリスタンガンさ  
こういう時の為にね」

『来人、バイオレンスメモリの破壊を確認した』

「そっか、じゃあ帰ろっか！」

「あ…ああ…」

来人達はその場を放れた

## 第21話（後書き）

駄文になってしまったかもOTL

来人「そりゃ深夜のテンションで書くから…」

フィリップ『とりあえず今回は上手く出来なかった部類と判断して  
良いんだね？』

うん、良いです…

とりあえず次回はシャルロットの番外編の予定です

それでは…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8603u/>

---

インフィニットストラトス ISと仮面ライダーを手にした者

2011年10月24日01時59分発行